仮面ライダーフリード

フォーエバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーフリード

【Ｎコード】
Ｎ９９６０Ｕ

【作者名】
フォーエバー

【あらすじ】
バトスピと仮面ライダーが大好きな少年、神竜　勇次はスピリットたちからバトルライバーを託され、フリードに変身し、カードラーに立ち向かう。

仮面ライダーフリード紹介

神竜勇次

物語の主人公で、父親譲りの赤い髪と母親譲りの青い目をした、札幌男子専門学校に通う９歳の小学三年生。
バトスピと仮面ライダーが大好きで、お気に入りカードはストライク・ジークヴルム、ストライクヴルム・レオ、ジークフリーデン、ジーク・カタストロフドラゴン。
お気に入りライダーはオーズと電王。
好物は中華物。得意な教科は国語と算数。
得意なスポーツはサッカー。
ちなみに幼稚園の頃、剣道で鍛えていたので剣勝負は得意。
幼い頃、動物が何を伝えているのかを読めることができるがあって、実は・・・。

仮面ライダーフリード

ジークフリードがモチーフで赤と青の身体をし、肩に黄色の尖った装甲をつけている、額にはブーメラン形の青い角があり、オレンジの複眼をし、背中には赤い鋼の翼があって、神竜　勇次が変身する。
ちなみに、浄化技は一切通じない。
決め台詞は「俺は、仮面ライダーフリード！」

バトルライバー

フリードに変身するための道具。

ディケイドライバーがモチーフ、全体が赤で、中心に黄色いボタンがある。カードを差込み真ん中のボタン押す事で変身や召喚が出来る、紋章はジークフリードの顔に似た形。

カードブッカー

ライドブッカーがモチーフ、何枚もカードを閉まえ、剣に変形できる。開くだけでカード一枚が飛び出す。色は青。

ライドジャリバー

マスターソードがモチーフ。レアのマジックカード一枚を差し込むことで様々な必殺技を発動できる、色は黄緑色。

スピリッツカード

変身するXカード。

技を発動し能力を上昇させるマジックカード。

スピリットを使った武器を召喚させるスピリットカード。

異空間を作り出せるネクサスカード。

武装合体するブレイヴカードがある。

仮面ライダーフリード紹介（後書き）

設定はこのくらいです。次回は本編スタートです。コメントがありましたら出してください。

パート1　誕生、新ライダー前編

今から４０年前、世界征服を企む悪の組織から全てを守るために立ち上がった、仮面で姿を隠した仮面ライダーがいた。

夫々のライダーは自分達が持つ能力を生かして怪人たちの野望を打ち砕いていった。

そして今新たなライダーが誕生しようとしてる。

パート１　誕生、新ライダー

札幌男子専門小学校

午後２時半になり、生徒達は自分達の家に下校していた。

生徒「じゃあね！勇次」

？？？「じゃ！」

勇次と呼ばれた赤毛で青い目の９歳の少年は花咲　勇次。いつも帰り道にしている街中を道路を見つけて、車がこないか確認しながら

すすんでいく。

勇次「（時間割と明日の足を準備して、宿題した後なにしようかな〜）」

心の中でそういっているとたん、誰かが勇次の両肩を叩いた。

勇次「うわ！何だ翔希か。やめろ手いつもいってっるじゃん」

勇次の方を叩いた少年は千悟　翔希。勇次の幼馴染だ。

翔希「ゴメンゴメン。勇次今日は暇？バトスピやんない？」

勇次「ありがと。でも来週の月曜日の準備と宿題をしてから行くよ。じゃ」

翔希「公園で待ってるから！」

勇次「うん！」

勇次と翔希は一旦家に帰って、学校の準備と宿題をすますために別

れ、それを見ていた小さい生き物がいた。

???「あの子が、新たな仮面ライダー」

数時間後、夜9時になり勇次は自分の部屋で睡眠していた。

夢

勇次「ん?此処は何処?」

勇次は周りを見ると朝になって、どこかの神殿にいた。

すると勇次の目の前に、ルビーの形をした物が現れ、それが砕け、二本足で立つ赤い龍が現れた。

勇次「ジークフリード!?」

すると右からダイヤモンドが現れ、砕かれると下半身が要塞になっている銀色のロボットが現れた。

勇次「オーディーン!?」

さらに左からサファイアが現れ、砕かれると両腕に包帯が巻かれている赤い巨人が現れた。

勇次「タイタスまで！？」

そして、勇次の目の前に光の玉があらわれ、形が変わり、小さい人間の姿となった。

勇次「今度は妖精？」

？？？「いや、妖精じゃない、精霊だよ」

勇次「精霊か。あんたは？」

？？？「僕は、龍精霊スピリッツ」

勇次「スピリッツで言うんだ。どうして俺の夢に？」

スピリッツ「君に、渡さなきゃいけない物があるんだ」

勇次「渡さなきゃいけない物？」

スピリッツ「ジークフリード達を見て」

ジークフリードは口から炎。オーディーンは背中のキャノン砲から

光線。タイタスは衝撃波を放ち、それが勇次の目の前で融合し、ベルトとカードケースが合体した物となった。

勇次「これは？」

スピリット「ベルトのはバトルライバー。カードケースのはカードブッカーだよ。これで君は、どんな武器や技を駆使する、仮面騎士になれる。」

勇次「仮面騎士？」

スピリッツ「騎士の名前は今は教えられないけど、使い方は教えるよ。先ずカードブッカーを開いてそこからカードを取り出して。」

勇次は言われた通り、カードブッカーを開いてカードを取り出し、そのカードはジークフリードのカードだった。

スピリッツ「そのカードがxレアだったらそのカードを差し込んで。」

勇次はジークフリードのカードを差し込んだ。

スピリッツ「そして、バックルを腰につけて、変身て叫んだら、バックルの真ん中のボタンを押して」

勇次はバックルを巻きつけて、「変身！」と叫ぶとボタンを押した瞬間に光が空間全体を被い、勇次は夢から覚めた。

勇次「夢か・・・。ん？」

勇次は右手に何かを持っていたので、見てみると、バトルライバーとカードブッカーが握ってあった。

勇次「仮面騎士って・・・。何のこと?」

そう言うと、勇次は再び眠りに付いた。

つづく

パート1　誕生、新ライダー前編（後書き）

次回、フリード登場。

パート2　誕生、新ライダー後編

翌朝になり、勇次は６時に起床し、パジャマから自服に着替え、１階の洗面所で顔を洗い、居間に入った。

勇次「おはよう。おかさん」

？？？「おはよう勇次」

食事の準備をし、勇次がおかさんと呼んだ勇次より明るい赤髪の女性は神竜　飛鳥。植物学者を務めている２７歳。

勇次「おとさんは？」

飛鳥「今日も庭で植物の水やりをしてるわよ」

そう言われると勇次は窓を開け、そこには赤いジャケットを着た男がいた。

勇次「おはよう、おとさん」

？？？「おはよう勇次」

勇次がおとさんと呼んだ男性は神竜　信二。動物保護員をつとめている３４歳。わかった

勇次「早くしないと、朝食先に食べちゃうよ」

信二「分かった。今行くよ」

数分後。朝食を済ませ、自室に入って漢字の宿題を終え、テレビの前に座り、リモコンでテレビの電源を入れた。

勇次「今日はこれ見よう」

パート２　誕生、新ライダー後編

月面

その地下に巨大な紫の光の塊があり、そこから紫の光線が地球に向かって放たれた。

地球

テレビ観賞を終えた勇次は、休日にはいつも行うランニングを行い、今は公園でブランコに座っていた。

勇次「あーあ、南下面白い事ないかな～？」

すると空から紫の光線が現れ、スクラップ置き場に直撃していた。

勇次「なんだ！？いってみよ！」

驚いた勇次は光線が直撃している、スクラップ置き場に向かった。

スクラップ置き場

光線は壊れたエンジンに直撃し、浮かび上がっていた。

そこに勇次が到着した。

勇次「どうなってんの？」

するとエンジンはみるみる形が変わっていき、金色の身体、背中には鉄の羽、頭には鋭い口ばしが付いたメタルカードが誕生した。

勇次「か、怪人！？」

勇次が驚いているうちに、口から炎を放った。

勇次「うわ！」

勇次は慌てて交わす。

勇次「どうすれば・・・！？」

勇次はポケットからバトルライバーを取り出すと、夢の言葉を思い出した。

勇次（バトルライバーにXレアのカードを差し込んで、腰に巻く）

勇次は夢で言われた通り、Xレアカードを差込み、バトルライバーを腰に巻いた。そして・・・。

勇次「変身！」

ライバーの中心のボタンを押すと、男の声が響く。

「カメンチェンジ・フリード！」

勇次の周りに、ルビー、ダイヤモンド、エメラルド、サファイヤ、パール、キャッツアイが現れ、勇次の身体と融合した。

赤と青の身体、額に青い角、肩の黄色いとがった装甲が付いた仮面ライダーフリードに変身した。

つづく

パート3　フリードの力

「カメンチェンジ・フリード！」

パート3　フリードの力

バトルライバーを装着して、勇次は仮面ライダーフリードに変身した。

フリード「俺は、仮面ライダーフリード！・・・って、ええ！？嘘！？」

フリードは自分が変身し、勝手に何かを口にしたため、体の一部々見ながら驚愕し、感じないものがあった。

フリード「しかも何にいってるんだ？（それに、怖いって思わない・・・。）」

そう思っているうちに、メタルカードは口から火炎放射をはなった。

フリード「ん？とお！」

フリードはメタルカードラーの火炎放射を飛び交わし、右側に移動した。

フリード「（ん？体が勝手に）」

そう思っていると、左手でライドジャリバーを持ち、カードブッカーを剣に変形させて右手に持った。

フリード「剣が付いていたんだ。よし、これなら」

フリードは走り出し、メタルカードは両手に鋭い爪を出し、交わしながら刃をぶつけ合い、メタルカードラーは一旦後退して、両手から針を連続で放った。

フリード「イテッ！やったな！」

フリードはライドジャリバーを右腰に、カードブッカーをカードケースに変形させ、左腰に取り付けた。

フリード「中のカードを使ってみるか」

そういうとカードブッカーを開き、ロクケラトプスのカードを取り出し、バトルライバーに差し込んだ。

「ウェポンライド・トプスナックル！」

すると右手が光だし、ロクケラトプスの頭の形をした武器が召喚された。

フリード「スピリットを使うとこうなるのか。よし！」

メタルカードは飛び上がりとつげきしてきたが

フリード「おうらあ！」

トプスナックルで飛ばされ、地面に叩きつけられ、その内にフリードは右足にライドジャリバーを取り付け、ライバーの中心のボタンを押した。

「ファイナルアタック・スピリットファイナルキック！」

フリードは翼を広げ、飛び上がった。

フリード「スピリットファイナルキック！」

炎を身にまとい、急降下してメタルカードを貫き一旦引いて、メタルカードが爆発すると、フリードは腰を突いて変身が解けた。

勇次「はあ、はあ、はあ、こんなに疲れたのは初めてだよ。」

すると上空から光の玉が現れ、その光は小さい人間の姿の変わった。

勇次「君は、スピリッツ！？」

スピリッツ「覚えててくれたんだ」

勇次「あのさあ、俺が変身したあの姿は？」

スピリッツ「あれは仮面ライダーフリード。僕が言った仮面騎士だよ」

勇次「え！？俺、仮面ライダーに変身したの？」

スピリッツはそれを聞いて頷いた。

勇次「それに、俺が戦ったあの怪人は？」

スピリッツ「あれはカード獣。」

勇次「カード獣？」

スピリッツ「夢の中で、話すよ。さあ家に帰らないと。」

勇次「あ！そうだった。早く帰って手伝わないと」

スピリッツは姿を透明にして、勇次と共に、花崎家に向かった。

つづく

パート4　夢の中の説明

メタルカードラーを倒して数時間後の午後9時、勇次は睡眠に入り、スピリッツは光の玉となって、勇次の脳に入った。

勇次の夢

スピリッツ「ごめんね。君のお父さんとお母さんに聞こえないように、夢の中で話すしかなかったんだ」

勇次「ああ、それで。で、俺が変身したあの仮面ライダーは？」

スピリッツ「君が変身したライダーの名前はフリード。君の好きなバトルスピリッツのカードを駆使して戦う仮面騎士さ」

勇次「なるど。それに俺が怪人と戦ってる時に、ロクケラトプスのカードを使ったら、武器になったんだけど、どうなってるの？」

スピリッツ「カードを使うとどうなるか説明するよ」

パート４　夢の中の説明

スピリッツは右手で指差し、光の線を放つと、四枚のバトスピカードが現れ、描かれている方を勇次に向けた。

スピリッツ「Ｘレアじゃないスピリットカードを使うと、、スピリットの身体の一部の形をした武器を召喚できる。だたし時間があってね」

勇次「時間って？」

スピリッツ「例えば、君が使ったロクケラトプスのコストは１。そのコスト１つにつき、一分間経つまでそのままあり続けられるんだ。ちなみにコスト〇の時間は１分間だけどね」

勇次「なるほど。マジックカードを使ったらどうなるの？」

スピリッツ「マジックカードを使うと、カードの説明と同じように、能力が上がったり、回復したり、攻撃でき、レアの場合は、必殺技が使えるんだ」

勇次「じゃあ、ネクサスを使ったら？」

スピリッツ「ネクサスを使うと、戦うための別空間に転送できるんだ。」

勇次「ブレイヴは？」

スピリッツ「ブレイヴを使うと、ブレイヴフォームというブレイヴスピリットの姿になれることが出来、その武器はスピリットと違って制限無しで、長く使える」

勇次「他のXレアを使ったらどうなるの？」

スピリッツ「他のXレアを使うと、違う姿に変身できて、その間は能力が変わるんだ。でもコスト9以上と12宮はレベルを上げていかないと使えないんだ」

スピリッツはそう言うと、四枚のカードに、光の線を放ち、カードを地面に沈めた。

スピリッツ「フリードの説明はこの通り。それに、難しいと思うけど、君が戦った怪人の事を話すよ」

スピリッツは後ろ側を向くと、両目から光線を放ち、光線は途中で

止まり、その場所には月の映像が映された。

勇次「月？」

スピリッツ「月の地下に移し変えるよ」

スピリッツが月の地下に移し変えたそこには、紫の物体が集まっている物があった。

勇次「何あれ？」

スピリッツ「あれはカードラー。まだ分かってないけど、何かの集合体なんだ」

勇次「集合体？ああ、集まって出来たものか。それで？」

スピリッツ「カードラーは地球に向けて、生命光線という物体に命を与え、怪人化する光線を放ち、物体に取り付いて、カード獣という怪人を作るんだ」

勇次「簡単に言えば、カードラーは命を与える光線を発射して、俺が戦った怪人の仲間を作るって事は分かったよ」

スピリッツ「その通り」

勇次「でも、何で俺がフリードに？」

スピリッツ「勇気が高くて、正義感溢れているから・・・ん？どうしたの？」

スピリッツは勇次の顔を見ると、悩んでいる表情になっていた。

勇次「俺、ちゃんと戦えるかな？」

スピリッツ「絶対戦い抜けられるよ。君の正義感は誰よりも大きいし、僕も付いているから心配しないで」

勇次「そう言ってくれるなら、最後まで諦めずに戦ってみるよ」

スピリッツ「よし、その調子。それじゃ、お休み」

勇次「お休み」

スピリッツは光の玉となって、勇次の夢から抜け出した。

つづく

パート5　バトスピ勝負

翌朝の7時、勇次はいつものように早起きをし、カーテンを開き、パジャマからTシャツと半ズボンの自服に着替え、スピリッツは太陽の光で目覚める。

スピリッツ「おはよう勇次」

勇次「おはようスピリッツ」

スピリッツ「早起きしたんだ、えらいよ」

勇次「まあいつもやってる事さ。さあて、宿題を済ませないと」

勇次は自服に着替えた後、机に座り、1日6ページの国語と算数の宿題を済まし、一階のリビングに向かい、隣の台所から、信二がどんぶり二つを持ってきた。

勇次「おはようおとさん」

信二「おはよう勇次」

勇次「あれ？おかさんは？」

信二「会議があるっていって、６時に研究所にいったよ」

勇次「ふ～ん。植物学者も大変なんだ。」

信二「まあ、砂漠のような場所を緑豊かにしないといけないからね。それより食べよ」

５分後。

勇次「じゃあ全部かたずけておくから」

信二「留守番頼むよ。じゃ、いってきまーす」

勇次「いってらっしゃい」

勇次が言うと信二はドアを閉め、仕事場である大きな喫茶店に向かった。

勇次「さあて、かたずけておかないと」

勇次は茶の間にある丼ぶりを台所の水道に置き、中に水を入れ、床ふきや掃除機で埃を吸い終え、二回の自室に上がった。

勇次「さあて、バトスピしてくるか」

スピリッツ「何処行くの？」

勇次「今日友達とバトスピする約束があるんだ。留守番よろしく」

そう言うと一回に下がり、外に出て、自分の自転車に乗り、バトスピセンターに向かった。

そこに到着し、中に入ると、翔希がテーブルのいすに座っていた。

勇次「やあ翔希」

翔希「やあ。今日のデッキは何の属性だい？」

勇次「今日は赤と白デッキなんだ。翔希は？」

翔希「僕は緑の白のデッキさ。さあやろう」

パート５　バトスピ勝負

勇次がいすに座ると２人はテーブルの右上に、デッキを置き、左下にライフと書かれている所にコア５個、その下にリザーブと書いてあるところに４個を置いた。

勇次「じゃあ先行どうぞ」

翔希「僕のターン、ドロー！」

手札５
ライフ５
リザーブ４
トラッシュ０

デッキから一枚カードを引き、カード一枚をフィールドに置き、コア一個を乗せた。

翔希「ディオマンティス召喚。ターンエンド」

勇次「俺のターン、コア、ドロー」

手札５
ライフ５
リザーブ５
トラッシュ０

勇次もデッキから一枚引き、二枚のカードをフィールドに置き、一枚にコア二個、もう一枚にコア三個を置いた。

勇次「ブレイドラ、ディノニクソー、夫々レベル２で召喚して、二体でアタック！」

翔希「ライフで受ける！」

ライフ５→３
リザーブ０→２

勇次「ターンエンド」

翔希「僕のターン、コア、ドロー、リフレッシュ」

ライフ３
リザーブ６
トラッシュ０
手札５

翔希「ヤンオーガレベル２で召喚」

リザーブ６→０
トラッシュ０→３
手札５→４

翔希「ディオマンテスでアタック！」

勇次「ライフで受ける！」

ライフ５→４
リザーブ０→１

翔希「ターンエンド」

勇次「俺のターン。コア、ドロー」

リザーブ２
トラッシュ０
手札４

勇次「ディノニクソーとブレイドラのレベルを1に下げて、モルゲザウルス、レベル3で召喚」

リザーブ2→0
トラッシュ0→2
手札4→3

勇次「モルゲザウルスでアタック！アタック時効果で、BP＋2000」

翔希「ヤンオーガでブロック！」

リザーブ0→5

勇次「ターンエンド」

翔希「僕のターン。コア、ドロー、リフレッシュ」

手札5
リザーブ12

翔希「ザニーガン、イグドラシル、夫々レベル２で召喚」

手札４→２
リザーブ１２→０

翔希「イグドラシルでアタック！さらにディオマンティスのコアを使って、インビジブルクロークをイグドラシルに使用！」

トラッシュ６→７

ライフ４→３
リザーブ０→１

翔希「さらに、ザニーガンでアタック！」

勇次「モルゲザウルスのコアを使って、マジックミストカーテンをザニーガンに使用！」

翔希「ターンエンド」

勇次「俺のターン。コア、ドロー、（来た！）リフレッシュ」

手札４
リザーブ５

勇次「ブレイドラ、ディノニクソーのコアを使って、ノーザンベアード２体召喚」

手札４→２
リザーブ５→０
トラッシュ０→５

勇次「ターンエンド」

翔希「（ノーザンベアードのコアブースとは厄介だ、始末しないと）俺のターン。コア、ドロー、リフレッシュ」

手札３
リザーブ１３

翔希「イグドラシルをレベル３に上げて、ポーラキャリバー召喚」

手札３→２
リザーブ１３→８

翔希「イグドラシル、ポーラキャリバーでアタック！」

勇次「ノーザンベアード2体でブロック！」

リザーブ0→4

翔希「ターンエンド」

勇次「俺のターン。コア、ドロー、リフレッシュ」

手札3
リザーブ10

勇次「リバイブドロー」

手札3→2→4
リザーブ10→7

勇次「さらに、ノーザンベアード、イグアバギー、夫々レベル2で召喚して、ターンエンド」

手札4→2

リザーブ7→0

翔希「俺のターン。コア、ドロー、リフレッシュ」

手札3
コア17

翔希「バルファランス、レベル3で召喚し、ポーラキャリバーブレイブ！」

バルファラスBP10000→16000
コア17→13→14

翔希「さらに、サニーガン2体レベル2で、トーテムオールを召喚して、ターンエンド」

コア14→2
手札3→0

勇次「俺のターン。コア、ドロー、リフレッシュ」

手札3
リザーブ7

勇次「イグアバギー、レベル２でカノン・アームズ召喚」

手札３↓１
リザーブ７↓１

勇次「さらに、イグアバギー２体、ノーザンベアードのコアを使って、ルナテック・ストライクヴルム、レベル２で召喚」

手札１↓０
リザーブ１↓０

勇次「カノン・アームズ、ルナテック・ストライクヴルムにブレイヴ！」

ルナテック・ストライクヴルムＢＰ８０００↓１３０００

勇次「ターンエンド」

翔希「僕のターン。コア、ドロー、リフレッシュ」

手札１

リザーブ6

翔希「トーテムオールをレベル3にアップして、ブレイブアタック！」

勇次「ライフで受ける！」

ライフ3→1
リザーブ0→2

翔希「ターンエンド」

勇次「俺のターン。コア、ドロー（きた、勝てる！）、リフレッシュ」

手札1
リザーブ7

勇次「ルナテック・ストライクヴルムをレベル3にアップ」

リザーブ7→6

勇次「ブレイブアタック！」

翔希「ライフで受ける！」

勇次「ルナテック・ストライクヴルムのレベルを2に下げて、マジック、ダブルハート！」

リザーブ6→0

翔希「しまった！」

ライフ3→0

勇次「よっしゃ！」

翔希「やっぱり強いや、勇次は」

勇次「今回はたまたまなだけ。またやろう、じゃ」

翔希「じゃあね」

翔希がそう言うと、勇次は家に戻るため、バトスピセンターを後にした。

つづく

パート6　スピリット三昧

夏休みが終わり、二学期が始まり、勇次は札幌男子専門小学校で再び学校生活を送っており、今は3年教室で、2時間目の算数が行われている。

教師「Aさんの学校では年に一度１５０人の生徒が集まって、肝試しを開きます。今年は５０倍の人数の生徒がやってきています。では今年は何人来たでしょう？書ける人。」

勇次「（簡単々。）はーい！」

教師「では神竜君」

勇次は黒板の前に立ち、計算の答えをチョークで書き付けた。

教師「正解」

勇次が書いた答えは７５００人。ちなみに、勇次は国語（漢字）と算数は得意なのである。勇次は翔希の隣の自分の席に戻った。

パート6　スピリット三昧

数分後・・・。

授業が終わり昼休みになって、勇次は翔希と良く行く最上階で昼食をとりながら、話し合っていた。

翔希「あのさ勇次」

勇次「ん？何？」

翔希「将来決まった？」

勇次「将来？ああ、俺、声優になろうって思ってるんだ」

翔希「声優か。どうして？」

勇次「春休みに商店街の本屋で仕事のマンガを読んで見つけて、普段は体験できない事が出来るって書いてあったから、それで声優になる事を決めたんだ。翔希は何か将来あるの？」

翔希「僕はレーサーになろうて思ってるんだ。ぶっちぎって走るのが夢なんだ」

勇次「かっこいい夢持ってんじゃん」

ピーンポーンパンポーン

昼休みの終わりのチャイムが鳴り、グランドまで響いていく。

翔希「やば！早く戻んないと授業に遅れる！」

2人は大急ぎで5時間目が図工のため図工室に急いで向かっていった。

数分後。学校が終わり、勇次は自分の家に向かっていた。

ビビビビビビビビ！

勇次「？」

勇次は右ポケットのバトルライバーから音が聞こえたので、それを取り出すと、バトルライバーの中心のボタンが赤く点滅していたので、そこのボタンを押すと、光が現れ、いつの間にかテレビ塔の近

くに転送されていた。

勇次「どうなって・・・あ！」

勇次は周りを見ていると道路で魔術師を思わせ、両腕が熊の腕のカード獣が暴れているところを発見し、その道路に向かった。

勇次「止めろ！カード獣！」

???「ん？何だ小僧？」

勇次「カード獣が喋った！？」

???「俺のようなカード獣を知っている事は、お前メタルを倒したフリードだな！」

勇次「（メタル？この前倒した奴か）そうさ。お前は」

???「俺はどんな硬いものと厚いものを両爪だけで粉砕するベルドカードだ。ちょうど戦う相手が欲しかったところだぜ！」

勇次「だったら、変身！」

勇次はフリードに変身し、カードブッカーを剣に変形させ、ライドジャリバーと共に手にした。

ベルド「二刀流か、だったら！」

ベルドカードは両方の手の平を真っすぐにし、その手は紫に光り、先に攻撃を仕掛けた。

フリード「うわ！」

フリードは吹き飛ばされたが、途中で耐え切った。

フリード「だったらこっちは、でりゃあああ！」

フリードは飛び上がり、ライドジャリバーでベルドカードを斬り付けたが、効果が無かった。

ベルド「ふん、痛くも無いな。食らえ！」

ベルドカードは左腕で切りつける。それを受けたフリードは少し後

退した。

フリード「武器が駄目なら・・・！」

フリードは紫の翼竜が描かれたカードを取り出し、バトルライバーに差込み、中心のボタンを押す。

「ウェポンライド・バーンボウガン！」

目の前にアイバーンの頭の左右にその両翼の羽がつけられた武器が召喚され、それを右手に持ち、引き金を引くと炎の槍が3発放たれ、ベルドカードが受けると、効いているようだ。

フリード「ははん、スピリットなら効くのか。次はこれで行くぜ。」

「ウェポンライド・グングアロー！」

目の前に1メートルある先が太くて、黄色いグングニルが変形した矢が召喚され、左手の拳で押すと、垂直に進む。

ベルド「うわぁ！」

ベルドカードは避けたが、半分避けられてなかったので、半分傷を被った。

フリード「次は」

「ウェポンライド・ザニーマグナム！」

さらに、ザニーガンに似た光線銃が召喚され、それを右腕で持ち、引き金を引くと、口から稲妻が放たれ、ベルドカードに直撃する。

ベルド「動けない・・・。」

ベルドカードは身体全体が麻痺して、うまく動かせなくなった。

フリード「最後は」

「ウェポンライド・ディノクロー！」

フリードの両腕にディノハウンドの爪が装着され、フリードは走り出し、斬り付ける。

フリード「でいりゃ！おりゃ！」

ベルド「うわーー！！」

フリード「よし止めだ！」

フリードは右足にライドジャリバーを取り付け、ライバーの中心のボタンを押すと必殺技を放つ。

「ファイナルアタック・スピリットファイナルキック！」

フリード「スピリットファイナルキック！」

ベルド「ぎあーーー！」

フリードは戦いを終え、少し膝を突き、勇次に戻り、立ち上がった。

勇次「さあて早く戻らないと。ん？」

勇次はバトルライバーがまた点滅している事を確認し、中心のボタ

ンを押しと、また瞬間移動をし、気が付いたら実家の前にいた。

勇次「何だか良くわかんないけど、とりあず家に入ろう」

勇次は家に近づき、「ただいま」と言って家に入った。

つづく

パート6　スピリット三昧（後書き）

次回は未定です。

パート7　マジック連射

ある日の事。勇次は退屈を癒すために、スピリッツと一緒に、ゲームセンターに来ていた。

勇次「おっと！おりゃ！」

勇次が挑戦しているゲームはカーレース。今は自分が選んだ赤いＦ－１と黄色いカウンタックが一位を争っていた。

勇次「もう少しで、よしゃあ！！」

勇次　一位

ゲームを終えた後、勇次はゲームセンターを出て、町中を歩いていた。途中で背負っているかばんを叩き、中からスピリッツが出てきた、しかも回りの人々はスピリッツに反応しない。スピリッツのような精霊は選ばれた者しか見る事が出来ない。勇次は前回のベルドカードと転送した事を話した。

スピリッツ「そのカード獣はメガカード獣だよ。メガカード獣Ｘレアのカード獣で、能力と知能は最も上で、喋る事も出来るんだ。それにバトルライバーはカード獣が現れると、点滅と音で報せて、ボ

タンを押せばその場所にいけることが出来るんだ。」

勇次「そうかだから。じゃあそろそろ、帰ろ」

スピリッツ「うん」

勇次はここから右側の道にある自転車置き場に向かい、そこから自分の自転車に乗って、家に向かっていった。

パート7　マジック連射

神竜家

勇次「ただいま」

飛鳥「お帰り。あ、勇次こんな物が届いたわよ」

勇次「何？」

勇次は飛鳥が右手で持っているポスターを見た。それは・・・。

小学３・４年スカイダイビング大会　開催日９月１０日

勇次「スカイダイビング大会？」

飛鳥「市内会の人が来てね、参加しないかってたずねにきたの、勇次は参加するの？」

勇次「スカイダイビングか。参加するよ！」

飛鳥「でも大丈夫？高い所から飛び降りて、ちゃんと着地しないといけないのよ。」

勇次「大丈夫。気をつけて着地するからさ」

飛鳥「滑らないようにね。あそれとゆりおばさんが連れてってくれるから、楽しんできなさい」

勇次「はーい」

そう言うと勇次は二階の部屋に向かう。

翌日

勇次は漢字の宿題をすまし、勇次は自分のテレビで仮面ライダーオーズ２０話を観賞していた。

「タカ！クジャク！コンドル！　タージャードルー！」

スピリッツ「勇次、なに見てんの？」

勇次「仮面ライダーオーズ。俺の好きな仮面ライダーなんだ」

スピリッツ「フリードの他にも仮面ライダーがいるんだ」

勇次「まあね。今出てるのはタジャドルコンボ。色は俺自慢の赤で、一番お気に入りのコンボなんだ。」

勇次が立ち上がるとテレビの電源を消し、バックを背負い、財布をバックに入れた。

スピリッツ「何処行くの？」

勇次「バトスピパックを買いにいくんだ」

スピリッツ「バトルライバーは？」

勇次「この通り、バックに入れてあるから。じゃ、行って来ます」

数分後、勇次は買い物によく行くコンビニを出て、星空の王者と書かれたパック３つを１つづつ開けて、中には・・・。

勇次「アスクレピオーズかサジット・アポロドラゴンは出なかったけど、シャイン・ブレイザー２、３枚目と黄のジーク・アポロドラゴンが出たし、そろそろ帰ろう」

その時、紫色の光線が川沿いに放たれ、勇次はそこへ向かった。

到着すると、そこには頭が骸骨で、鎧を身に着けたボーンカードと、胴体が卵に似ていて、鋭い爪のある腕を持つダンプカードがいた。

勇次「デモ・ボーンのカード獣とハンプダンプのカード獣か。変身！」

「カメンチェンジ・フリード！」

「ウェポンライド・モルゲハンマー！」

勇次はフリードに変身し、さらにモルゲザウルスの尻尾をモチーフにしたハンマーを召喚して右腕に装着し、ボーンは剣で、ダンプは火の玉で一斉に攻めるがフリードは受け止めルと同時に避け、後ろに回りこんだ。

フリード「おらよっと！」

フリードはモルゲハンマーを振り上げると、尻尾が伸び、ボーンとダンプに命中した。

フリードはその後に衝撃を感じた。

フリード「何だったんだ？まあいいか、次は」

フリードは頭に角が3本あり、青と黄色の身体の恐竜、ガルナールが描かれたカードを差し込むが・・・。

「ライドエラー」

フリード「あれ？」

差し込んで発動してもスピリットの武器は召喚されなかった。

フリード「どんなってんの・・・おっと！」

フリードは考え込んでいると、ボーンが飛び上がりだしたので、ライドジャリバーで打ち返す。

フリード「先ずは動きを封じるか。えーと？」

フリードはカードブッカーから一枚のカードを取り出すと、そのカードには青の鎖と鍵閉めが描かれていた。

フリード「マジックか、使ってみよ」

「マジックアタック・サイレントロック！」

フリードがマジックを発動すると、ボーンとダンプの身体が青くなり、動かなくなった。

サイレントロックは透明の鎖で身体の動きを封じる事ができる。しかもこの時、相手の意識も鎖で封じられる。

フリード「サイレントロックを使うと動きをとめちゃうのか、よし今のうちに」

フリードはバトルライバーの中心のボタンを押した。中心のボタンをカードを差し込まずに押すと、スピリッツと通信が出来る。

スピリッツ「どうしたんだフリード？」

フリード「デモ・ボーンとハンプダンプのカード獣と戦ってたんだけど、ガルナールのカードを使おうとしたら、武器が出せなくなったんだ」

スピリッツ「もしかして、スピリットカード使った？」

フリード「そうだけど。何かやばかった？」

スピリッツ「呪撃を持つスピリットのカード獣は武器や技の直接攻撃を受けると、倒されるまで　その技を封じてしまうだ。スピリットの場合、そのスピリットと違う属性のスピリットのカードを封じ

るんだ」

フリード「なんだって！じゃあマジックだけで攻撃しろってこと？」

スピリッツ「そうなるよ」

通信している最中にサイレントロックの効果が切れ、ボーンとダンプが動き出した。

フリード「やばい！通信切るよ、じゃ」

フリードは指をボタンから離すと、通信が切れた。

フリード「何か良いカードは・・・」

フリードはカードブッカーからカードを取り出すと、そこカードには下半身が要塞のようになっており、背中に二つのキャノン砲をつけたロボットが描かれていた。

フリード「オーディーンか。使ってみるか」

「フォームチェンジ・オーディーン！」

フリードはオーディーンのカードを差し込むと、身体が銀色の鋼鉄になり、頭の左右に角が生えた。

フリード「本当に変わっちゃた。試してみるか」

ボーンが右に剣で。ダンプか左に鋭い爪で攻撃を仕掛けたが、命中する瞬間、二つの拳で殴りつけると、ダンプとボーンは吹き飛んだ。

フリード「殴り一発で吹き飛ぶのか。こいつでもう一発！」

「マジックアタック・マインドフレア！」

マインドフレアのカードを発動させると、フリードの身体が赤くなった。

マインドフレアは発動すると、攻撃能力が上昇する。

能力を上昇させるマジックは、自分以外にも使える。

フリード「力が漲ってくるぞ！次はこれだ！」

「アタックマジック・フレイダンス！」

フリードは二つのフレイムダンスを発動させると、バーンとダンプの真上に火の雨が降り。それを受け、動けなくなった。

フリード「やばい、疲れてきた。回復しないと」

「アタックマジック・ホワイトポーション！」

ホワイトポーションのカードを発動させると、フリードの下に白い光が現れ、光が消えると正常になった。

ホワイトポーションは自分か仲間一人を疲労から回復させる事ができる。

フリード「回復完了！一気に決めるぜ！」

フリードはカードブッカーから二つの宝石が描かれた光るカードを取り出し、発動させた。

「ファイナルアタック・エリクサーストライク！」

するとフリードの目の前に銀に光る二つの巨大な宝石が、現れた。

フリード「エリクサーストライク！」

フリードは二つの宝石を二つの拳で殴りつけると、その勢いで二つの宝石は突進し、ボーンとダンプの身体を貫き、爆発した。

フリードは変身を解き、勇次に戻る。

勇次「上級の次は技封じか。これから厄介にならなきゃいいけど」

勇次はコンビニに戻り、自転車に乗って、自分の家に帰っていった。

勇次の部屋

勇次「さあて、デッキを作ろ」

勇次は攻撃防御を考えながら、デッキの改造を始めた。

つづく

パート8　ネクサス空間とブレイブフォーム前編（前書き）

フリード専用バイク登場です。

パート8　　ネクサス空間とブレイブフォーム前編

火災状態マンション

フリードは中に入り、５歳の少年ををさがしていた。

フリード「坊や！どこにいるだい！？」

番号が２００番と書かれたヘアのドアを開けると逃げ遅れた少年がいた。

フリード「いた！今助けるから！」

「マジックアタック・ミストカーテン！」

フリードはマジックを発動させると、額の角から水色の光が現れ、少年に放つとその光は男子の身体を包む。

フリード「これなら傷をつけずにすむぞ」

フリードは男子を背負うと、背中の赤い鋼の翼を広げ、窓を割って飛び出し、ゆっくり降下して、着地した。

「マジックアタック・ホワイトポーション」

フリードはマジックを発動させ、少年の傷全てを回復させた。

フリード「よし、後は消防に任せておくか」

フリードは再び翼を広げ、マンションを飛び去った。

パート８　ネクサスフィールドとブレイブアーマー前編

翌日、勇次とスピリッツは家の玄関で、ヘルメットを被りながら誰かを待っていた。

勇次「早くスカイダイビングやりたいな」

スピリッツ「スカイダイビングってそんなに面白いのかい？」

勇次「スカイダイビングって言うのはね、飛行機から飛び降りるスポーツで、パラシュートを開いて、降りていくのさ」

スピリッツ「それ誰でも出来る？」

勇次「身体を鍛えて、着地になれないとできないだよ」

スピリッツ「そうか、だから毎日鍛えてたんだ」

勇次「まあね。おっ着た！」

右側からカウンタックが近づき、勇次の目の前で止まった。

勇次「ゆり姉ちゃん。久しぶり！」

ゆり「こっちも久しぶりね、勇次君」

彼女は中野ゆり。飛鳥と同じ学校の高等部に通っていた3歳年上の女性。メカニックを務めている。

勇次「さあ早く行こう」

ゆり「急がなくても時間はあるから」

勇次はゆりのカウンタックに乗り、スカイダイビング会場がある、山に向かった。

数分後、スカイダイビング会場に到着し、ゆりは勇次に携帯電話を渡して、住まいのマンションに戻った。

スピリッツ「どうしんだ？」

勇次「何か緊張してきて・・・・。」

スピリッツ「ゆっくり深呼吸して。落ち着くのが大事だから」

勇次は言われたとおりに深呼吸を五回した。

勇次「さてと準備するか」

勇次が準備するために、更衣室に向かうと女子にぶつかった。

勇次「ごめん！大丈夫？」

？？？「平気よ」

その少女は金髪のラングヘアで、緑の目をしていて、集合場に向かった。

勇次も更衣室に入り、スカイダイビングの姿に着替えた。

司会「皆さん自分と同じ番号の人を見つけたら、その人と組になりましょう」

大会は５０人まで参加でき、二組で行われることとなり、くじで組を決めることになっている。

勇次は５０番を当てた。

勇次「え～と俺と同じ５０番はどこかな？」

勇次が自分と同じ番号の紙を持っている人を探していると、周りにいた人全員の動きが止まり、ポケットからスピリッツが出てきた。

スピリッツはカード獣の反応を感じると、時間をとめる能力を発揮できる。

スピリッツ「カード獣の反応だ！此処から３０キロのところにいる！」

勇次「何だって！？探している時に現れて欲しくないな。変身！」

勇次はフリードに変身し、それと同時にそれと同時に、バトルライバーの中心のボタンを押した。

「サモン・ジークスライカー！」

すると前がジークフリードの顔、前のタイヤ固定部分が腕、後ろのタイヤ固定部分が足の形をした、赤いフリード専用バイク、ジークストライカーが走ってきた。

フリードはジークストライカーに乗り、スピリッツが感じるカード獣の反応を追いながら、カード獣のいる場所に進んでいた。

スピリッツ「反応が近い、右に曲がって！」

フリード「分かった！」

フリードはハンドルを右に曲げ、森につながる道を進み、途中で停車し、ジークストライカーを降り、森の中を進んだ。

スピリッツ「止まって、この辺りに反応が強い」

フリード「反応が強いのにいないってことは、飛び出してくるんじゃ・・・・」

その時、フリードの後ろに、赤い3つの何かが突撃してきた。

スピリッツ「フリード後ろ！」

フリード「ん？・・・おわっ！？」

フリードは間一髪に交わし、赤い3つの何かはフリードのほうを向けて着地した。

その赤い何かとは、前にレーザー砲が付いて目が黄色い、ザリガニに似たロボット、ザニーカードだった

フリード「ここじゃまずい。場所を変えるか」

フリードはコロッセオが描かれたカードを取り出し、ライバーに差し込んで発動させた。

「ネクサスオープン・シュンセイナガレルコロッセオ！」

するとライバーから青い光が現れ、フリードたちを包み、その光が消えると、フリードたちの姿は無かった。

つづく

パート8　ネクサス空間とブレイブフォーム前編（後書き）

事情により台詞や説明を加えました。

パート9　ネクサス空間とブレイブフォーム後編

ネクサス空間

この空間には、周りが青い月があり、夜空の覆われた、古びたコロッセオがあった。

その目の前に、フリードたちを包んだ光が現れ消えると、中からフリードたちが現れた。

フリード「此処がネクサス空間。でもザニーガンのカード獣だからこれで行くか！」

「フォームチェンジ・キャッスル・ゴレム！」

フリードは青白い、城を思わせる鋼の姿、キャッスルフォームに変わった。

パート9　ネクサスフィールドとブレイブアーマー後編

フリード「ザニーガンは赤の効果しか効かないから、この姿なら効くはず！」

フリードの背中の2つのバックバックが火を噴き、カードブッカーとライドジャリバーを持ってザニーカードたちに突撃し、吹き飛ばした。

フリード「どうだ！」

ザニーカード達はゆっくり立ち上がるが、硬い身体のため傷1つ付いていなかった。

フリード「イテ！」

ザニーカード一体が浮かび上がり、下についているレーザー砲殻青い光線を放った。

フリード「！おりゃ！」

フリードはカードライバーで光線を跳ね返すが、それは劣りで、もう一体のザニーカードが突撃し、フリードに激突した。

フリード「うわぁ！そんなのあり？」

さらに三体目のザニーカードは両腕を裏返しにし、発射工から火炎放射を放った。

フリード「だったらこっちは」

「アタックマジック・アームズインパクト！」

フリードはマジックを発動させ、地面を殴って衝撃を出し、火炎を打ち消し、ザーニカード三体に命中した。

フリード「これなら・・・え！？」

煙が晴れると、ザニーカードたちはまったく傷でいた。

フリード「どうなんだよ！？赤以外効くはずなのに」

ザニーカードのように重装甲を持つスピリットのカード獣は，指定属性以外の効果も受けないのである。

フリード「ナレーター！そんなの早く行ってよ！」

ゴメン！じゃあ、カードブッカーからカード一枚出して。

フリード「カード？」

それはブレイヴかい？

フリード「そうだけど」

じゃあこっからこれを使って頑張ってくれ。じゃあね。

フリード「使えって、まあいい、使ってみるか」

「アーマーブレイヴ・イビルウイング！」

すると背後から、前が剣の先で、翼が鳥の物となっているジェットパックが現れ、それが背中に装着された。

フリード「これがブレイブフォーム。ん！これはいける！」

フリードは勢いを入れると、空高く飛び上がり、それを追うべく、ザニーカード達も飛び上がり追跡した。

フリード「よしここで」

「ウェポンライド・ブレイドカッター！ディノチェンソー！」

スピリットカードを発動させると、右腕に橙色の丸いチェンソーと左腕に黄色い羽根型の刃がのが装着され、ディノチェンソーを回転させる。

フリード「おりゃ！」

チェンソーから赤い光の刃が、ブレイドカッターから黄色い光の刃が放たれ、それがザニーカード二体に命中すると、効果があり、そのまま墜落していった。

イビルウイングを装着してる間は、属性を持たない姿になることが出来る。

それと同時にディノチェンソーが時間切れになり、消えた。

フリード「時間切れか、よし次は」

「ウェポンライド・ブレイドカッター！」

スピリットカードを発動させると、左腕にブレイドラの羽に似たカッターが装着され、それを一旦引いて突き出すと、紫の光の刃が放たれ、がニーカードに命中し、先に落ちた二対のザニーカードの上に落下した。

フリードは着地し、ライドジャリバーに赤い輝くマジックカードを差し込んだ。

「ファイナルアタック・サザンクロス！」

ライドジャリバーの刃が炎に包まれ、フリードはそれを構える。

フリード「サザンダブルクラッシュ！」

フリードはライドジャリバーでXの字に描き、振り落とすと、炎の刃が突撃し、ザニーカードたちに直撃し、爆発した。

フリードはいつの間にか森に戻っていた。

フリード「あれ？さっきネクサス空間にいたのに・・・。」

スピリッツ「ネクサス空間はカード獣が倒されると、自動的にもとの空間に転送されるんだよ」

フリード「そうか、だから。それより早く会場に戻らないと」

フリードはジークストライカーに乗り、急いでス顔ダイビング会場に向かった。

数分後。

大会が開始され、勇次のパートナーは金治　かすみという、勇次とぶつかった金髪の少女だった。

司会者「それでは、神竜勇次君と金治かすみさんペアのスタートです。スタート！」

勇次とかすみは3メートルの高さから飛び降り、途中で勇次とかすみは白のパラシュートを開いた。

かすみ「久しぶり、スカイダイビングなんて」

勇次「前にもやった事があるのかい？」

かすみ「幼稚園の頃、三回もやった事があってね」

勇次「へー凄いや。しかし気持ち良いや」

つづく

パート１０　流星光臨　前編（前書き）

今回は前編で、中編に新ライダーが登場します。

パート１０　流星光臨　前編

バトスピセンター

勇次と翔希はいつも休日や下校の後に遊びに良く来る場所。今日は金曜日の午後４時で、バトスピで盛り上がっている。

翔希「ラグナ・ロックでアタック！」

勇次「ダークヴルム・ノヴァでブロック！」

翔希「マジックインビジブルクローク、ラグナ・ロックに使用」

勇次　ライフ２→０

勇次「あー、また負けた！でもホントに強いや、翔希のデッキは」

翔希「勇次のブレイヴキラーデッキも強いよ、グランウォーデンとスピニード・ハヤトのブレイヴを倒したんだから」

勇次「そう言われると嬉しいや。じゃあ俺帰らないといけないから

帰るよ、じゃ」

翔希「じゃあね」

翔希が言うと、勇次はデッキを持ち帰り外に出た。

翔希「勇次から不思議な何かを感じる。始業式以来けど」

パート１０　流星光臨　前編

バトスピセンターを出て自転車に乗り、同級生で紫の髪をしている青磁　海斗と噂話をしていた。

海斗「あのさ、うちの学校の森にまた出たんだってさ」

勇次「また出たって、あの森幽霊が？」

札幌男性専門学校の裏には、１年前から夜になり、人が入ると怪奇

現象がおきやすい森ある。
幽霊の仕業かと思われ、森幽霊といわれて、その森はあまりにも深さで暗いため、朝にもでるので、あまり人が近づか無い場所で、妖怪森といわれている。

勇次「海斗、幽霊の正体を暴くためにその森に行くんじゃ・・・」

海斗「そう」

勇次「あのさ幽霊は見た相手には襲い掛かるって言われてるんだぜ、幽霊が見ている事に気づいたら何するか分かんないよ」

海斗「良く暖まったお湯を幽霊に掻けちゃえば、逃げちゃうかもしれないよ」

勇次「効くかどうか知らないけど、おとさんやおかさんには嘘をついて話しておくから、じゃあ」

勇次が自転車に乗っているときにいつも通る道を行くと、家に到着し、自分の部屋に入った。

勇次「幽霊って本当にいる?泥棒が隠れて見つからないように作っ

た仕掛けだったらどうすんの？」

それをきいたスピリッツが勇次の顔に近づいて、勇次が言っていた事を聞いた。

スピリッツ「幽霊って、何のこと？」

勇次は自転車の帰りに、海斗と話した噂話を話した。

スピリッツ「学校の裏の森か、僕はそこに気になる事があるんだ」

勇次「気になる事？」

スピリッツは学校の裏の森から、人間には聞こえない鳴き声を聞く事を話した。

スピリッツ「その鳴き声はカード獣の鳴き声だと思うんだけど、しかも君が小さい頃に送り込まれたのが、幽霊の正体かもしれないんだ」

勇次「もしカード獣だったら海斗に逃げるように伝えるよ」

話し終えると、勇次はテレビをつけ、さらば仮面ライダー電王を見る。

翌日になり、勇次と海斗は１０時に合流し、学校の妖怪森に森幽霊を見つけるために、森の奥深くにいた。

幽霊に襲われたときに備え、懐中電灯を3本持っている。

勇次「海斗、探すって言ったって、幽霊を見るだけだよ。見つかったら大変だから」

海斗「そう心配しないで、懐中電灯を3本も持ってきたから・・・！？勇次！」

海斗が右の茂みから何かが近づいてきたので、近くの木のそばに隠れた。

勇次「もう、な「しっ！」？」

海斗「何か近づいてる・・・。」

勇次と海斗は少し覗いて見ると、白い何かが近づいてきる。

白い竜の形をした身体に、胸に銀の装甲、背中に角のような装甲をつけた、メガ・アポロカードだ。

つづく

パート１０　流星光臨　前編（後書き）

次回、いよいよ新ライダー登場！

パート１１　流星光臨　中編（前書き）

ラストで登場ですが、新ライダー登場です！

パート１１　流星光臨　中編

海斗「幽霊じゃない」（小声）

勇次（カード獣！そうかあれが幽霊の正体か）

歩いているメガ・アポロカードは途中で止まって、周りを見る。

メガ「人の気配がしたが、何処にいるんだ？」

海斗「気づかれたら、どうする？」

勇次「こんな事もあるかもって思って・・・。」

勇次は右のポケットから何かを取り出すと、右手には煙球が握られている。

パート１１　流星光臨　中編

海斗「いつの間に・・・（汗）」

勇次「俺がこいつを投げつけたら、海斗は先に逃げて」

海斗「勇次はどうすんの？」

勇次「俺がおとりになって、あいつを引き寄せる」

海斗「お前、何考えてんだ！？死ぬって！」

勇次「誰かが劣りにならないと、あいつが追ってきたら町が大変な事になんの！」

海斗「ごめん。お前よく考えてからじゃないと行動しないってこと、忘れてたよ」

勇次「大丈夫、沢山予備用の道具持ってきたから。よし、俺がこいつを投げて煙が出たらその隙に逃げて」

海斗「うん」

勇次は煙だまを巻いている髪を一部を抜き、メガ・アポロが後ろを向いた瞬間に、身体に当たらないように転がすと、届く直前で止まり、白い煙が吹きだしてきた

メガ「ごほっ！ごほっ！何だ？」

海斗「（今だ・・・！）」

海斗がタイミングよく走り出して見えなくなると、勇次はライバーを腰に巻いた。

勇次「変身！」

「カメンチェンジ・フリード！」

勇次はフリードに変身する。

それと同時に白い煙が晴れ、フリードが前に立ちはだかる。

フリード「幽霊が出るって噂を聞いて見にきたら、カード獣だったんだ」

メガ「誰だお前は？」

フリード「俺は、仮面ライダーフリード！」

メガ「お前が、カード獣を次々に倒しているフリードか。ちょうどいい、ブッ倒したかったところだぜ」

フリード「それはどうかな？（メガ・バイソンと合体したジーク・アポロドラゴンのカード獣なら赤と白と緑市か効かないから、他の色はいける！）」

「ブレイヴアーマー・サンダーカノン！」

フリードがブレイヴカードを発動させると、両翼に装甲と右腕に、右腕に先端に銅色の竜の形をしたキャノン砲が装着された。

サンダーカノンはバーベルなみの重さで、地面を叩き潰した。

メガ「カノン・アームズのブレイヴフォームか、だがこっちが上だ！」

メガ・アポロの背中の装甲についているとがったものが後ろから火を噴出し、メガ・アポロがそれをミサイルにして発射した。

フリード「え！？おっと！」

フリードは翼を広げ飛び上がり、サンダーカノンで、重さを絶えながら叩き落していく。

メガ「隙あり！」

メガ・アポロはタイミングを掴んで、口から火炎放射を放った。

フリード「その手は食わないよっと！」

フリードはサンダーカノンを火炎放射に向け、光弾一発を放ち火炎放射とぶつかると、煙が広がる。

メガ「煙にまぎれて俺を攻撃するつもりだな」

メガ・アポロが横に向くと、斜め側から橙色の光線が放たれ、メガ・アポロに直撃した。

煙が晴れると、斜め側にサンダーカノンの光線を放ったフリードがいた。

フリード「効いてるか」

直撃を受けたが倒れなかったメガ・アポロはフリードの方を向いた瞬間、額の二つのルビーが眩しい光を発し、それを見たフリードはふらつき始めて膝を突いたた。

フリード「き、急に目眩が・・・」

メガ「馬鹿なやつめ、俺はあのくらいの光線じゃあびくともしないんだよ。それに額のルビーの光は相手を目眩に出来るんだぜ」

メガ・アポロの額と胸にあるルビーから発する光は、相手を目眩状態にすることが出来る。

メガ・アポロがどんどん近づいて、止めをさそうとしたその時。

メガ「さあて、思う存分・・・？」

メガ・アポロが空を見ると、隕石（？）が落下してきた。

メガ「！？」

メガ・アポロは素早く退避し、隕石（？）は地面に激突して、そこから赤い何かが出てきた。

？？？「イッテテテ・・・。もう速すぎ・・・」

その赤い何かは背中に四つに分かれた翼があり、赤いバトルライバーを巻きつけ、緑の複眼で、額にはエメラルドがあり、頭の横に先を向けて９０度曲がった角がある赤い仮面ライダーだった。

？？？「ん？ジーク・アポロドラゴン？」

メガ「お前誰だ？見かけない姿だな」

？？？「僕かい？僕の名前は、仮面ライダーヴルム！」

つづく

パート11　流星光臨　中編（後書き）

次回、ヴルムの強さは？

パート12　流星光臨　後編（前書き）

今回はフリードの出番が少ないです。
それと感想不足なので、あったら書いてください。

パート12　流星光臨　後編

苦戦のフリードの前に、空から仮面ライダーヴルムが現れた。

メガ「仮面ライダーだと！？もう一人いたのか！？」

フリード「ん・・・？だれ・・・？」

ウルムはフリードの方を向き、フリードに近づく。

パート12　流星光臨　後編

ヴルム「君が仮面ライダーフリード？」

フリード「そう・・・だけど」

ヴルム「君、ふらついてるけど大丈夫？」

フリード「あいつの頭の宝石が光りだしたら、急に目眩が・・・。」

ヴルム「あいつの宝石の光は、目眩にするのか。此処は僕に任せて、君は今目眩しているからそこで休んでて」

ヴルムはメガ・アポロの方に向ける。

メガ「ヴルムとかいったな、どんな実力か見せてもらうぜ」

ヴルム「僕に負けて、後悔するなよ」

メガ「それはどうかな？」

ヴルムは額に右手を当てると、二つの刃が付いた剣を取り出した。

ヴルム「スタージャベリン！」

ヴルムのスタージャベリンとメガ・アポロの背中の装甲がぶつかり合う。

ヴルム「おっと！おりゃ！」

メガ「ふん！とお！」

ぶつかり合う中、ヴルムは一旦後退する。

メテオ「さすがブレイヴスピリット。だったらこっちも」

ヴルムはライバーの右側のカードケースからカード一枚を取り出し、ライバーに差し込んだ。

「アーマーブレイブ・スピニードウイング！」

ヴルムの背中から、わしの翼の形をした茶色い翼が現れ、それを装着すると、身体の赤に黒が混ざった姿に変化した。

ヴルム「へー、カッコいいんじゃない。ようしいくか！」

ヴルムは飛び上がり、スタージャベリンからスピニードウイングについていた二本の槍に持ち替えた。

勢いをつけて飛ぶと光速になる。スピニードウイングを装着すると、飛行速度が光速になることができる。

ヴルムは後ろに回りこんで二本の槍で切りつけた。

ヴルム「おりゃあ！」

メガ「ぐうぉ！？」

ヴルムはスピニードショルダーの羽を閉じ、うまく着地した。

ヴルム「あまり早すぎるのは効いたけど、メガ・バイソンと合体してもブレイブは効く。これで・・・！」

ヴルムはメテオヴルムのカードを一旦取り出してからまた差し込み、中心のボタンを押した。

「ファイナルアタック・メテオシューティング！」

ヴルム「メテオシューティング！」

ヴルムはスタージャベリンを捧げ、翼を広げて上空まで飛び上がり、

スタージャベリンを真下にして、そのまま急降下する。

メガ「まずい！」

メガ・アポロと背中の装甲が分離した瞬間、ヴルムはメガ・アポロに直撃し、爆発を起こした。

ヴルム「イッタタ、やった・・・って、いない！」

煙がやむと、メガ・アポロの姿は無く、背中の装甲だけが残っていた。

ヴルム「逃げちゃったか。あ、それより・・・。」

ヴルムはフリードに近づき、マジックを差し込んだ。

「アタックマジック・マジックブースト！」

マジックブーストはホワイトポーションのように、怪我と病気と疲労を回復させる事ができる。さらに、ブレイブフォームをつけた、または最強形態になっている戦士の攻撃防御を高める事が出来る。

回復したフリードは目眩の効果がきれ、ふら付かずに立ち上がる。

フリード「たすかったよ、有難う」

ヴルム「どういたしまして。しっかし疲れるなあ」

ヴルムはベルトを外すと、何と翔希の姿に変わった。それを見たフリードは驚愕する。

フリード「翔希！？」

翔希「ん？」

フリードはベルトを外すと勇次の姿の戻る。それを見た翔希は驚愕した。

翔希「えええええ！？勇次がフリードだったの！？」

勇次「まあね。でもどうしてヴルムになったんだ？」

翔希「それは・・・ん？」

翔希は空を見ると夕方になっていた。

翔希「いっけな！明日はなすからじゃあね」

勇次「じゃあ。（デモどうやってメテオになったんだろ？）」

新たな仮面ライダー、ヴルムが加わり、どうして翔希がヴルムになったのかそれは次回の話で。

つづく

パート12　流星光臨　後編（後書き）

いかがでしたか？次回は未定ですが、学力テストがあるためお休みします。

パート13　ヴルムの秘密（前書き）

長らくお待たせしました。どうぞご覧ください。

パート13　ヴルムの秘密

月面

そこにヴルムに破れて重傷を被ったアポロカードが、基地の入り口に入り込んだ。

アポロ「新しいライダーが現れたか、厄介になったな。」

白の機械の身体の、ストライクジークヴルムの姿をしたカード獣が現れた。

???「もどったか、アポロ」

アポロ「ストライクか」

ストライクとよばれたカード獣の名前は、ストライクカードという。

ストライク「新しい仮面ライダーが現れたんだって」

アポロ「ああ、ヴルムっていうらしいぜ。しかも中々早い」

ストライク「面白そうだな。ぜひ勝負してみたいな」

アポロ「じょうだんじゃねえ！今すぐ俺のブレイヴフォームであいつへのかりを・・・。」

興奮するアポロに、がストライク止める。

ストライク「アポロ、今のお前の身体じゃ返り討ちにあうだけ。ここは僕に任せて父上にこの事を伝えにいきなよ」

アポロ「・・・。わかったよ」

アポロはカードラーがいる地下中央に向かう。実はアポロとストラ

イクは双子で、カードラーが生み出した幹部カード獣でもある。

ストライク「さて、どのくらいの速さか見せてもらいにいくか」

ストライクは赤い翼を広げ、月面を飛び出し、地球に向かった。

パート13　ヴルムの秘密

場所は変わり千悟(せんか)家。

言い忘れていたが、翔希の実家は万能機械販売店、千悟電気の一人の坊ちゃんなのである。

ちなみに千悟電気は8号店まである。

二階の翔希の部屋で勇次と翔希がデッキを作り終え、課題のヴルムについて話している。

勇次「翔希、そのバトルライバーどうやって手に入れたんだい？」

翔希「確かあれは、二ヶ月前だったかな？」

時間は二ヶ月前に遡る。

翔希は電化製品を頼まれると、自転車で運ぶ仕事がある。その帰り道に女性の銅像が置かれている橋を通り過ぎると、何か空間の穴を発見した。

翔希「なんだろ・・・うわあああああ・・・！」

翔希は穴に近づくとそこに吸い込まれてしまった。

異空間

翔希「ここどこ？」

翔希は周りを見渡すと、何も無い大地が広がっていた。天空から橙色の身体と緑の複眼、分かれた翼をした竜が翔希の目に前に現れた。

翔希「メテオヴルム？」

すると右側の空から金色の鎧と剣、赤の翼、エメラルドがつけられた盾を持った騎士が現れた。

翔希「ヴァリエル？・・・うわぁ！」

最後に左側から銀色の鎧と赤いマントを巻きつけた巨人が、地面から地割れを起こして現れる。

翔希「今度はアレクサンダー？」

するとメテオヴルムは口を開けると、話し出した。

メテオヴルム「良くきてくれた、千悟　翔希君」

翔希「どうして僕の・・・って、喋った！？」

メテオヴルム「いきなり呼び出してゴメン、君に話さなければならない事があるんだ」

翔希「話さないといけないこと？」

メテオヴルム「今この地球は、邪心が集まった生命体に狙われているんだ」

翔希「邪心が集まった生命体に狙われてるって、何のために？」

メテオヴルム「ただ1つだけ分かっているのは、君達人のように自分達と違う生き物達を絶滅させること」

翔希「絶滅て、人や動物を全部殺すってこと！？」

メテオヴルム「うん。そこで奴らを倒すためには、純粋で正義と勇気溢れる9歳の少年が必要だってことが分かったんだ」

翔希「ちょっとまって！そいつらを倒してくれってことは分かったけど、何も無い僕にどう戦うけ！？」

メテオヴルム「大丈夫。ヴァリエル、アレクサンダー。」

ヴァリエルとアレクサンダーは頷き、三体は翔希を囲んで目を合わせると、両目から光線が放たれ、三つの光線が重なり合うと結晶化し、橙色のバトルライバーが完成した。

翔希はそれを持つ。

翔希「これは？」

メテオヴルム「それはバトルライバー」

翔希「バトルライバー？」

メテオヴルム「これを使えば、君はカードを駆使する、仮面騎士になる事が出来る」

翔希「仮面騎士？」

メテオヴルム「今君の前に仮面騎士になった少年がいる、彼と共にカードラーに立ち向かってくれ」

すると空間は光だし、翔希はあまりの眩しさに目を手で隠した。

気が付くと「夢か」と思い、バトルライバーが握られているのを確認すると、夢で無い事を確信した。

現在

翔希「それで僕はヴルムになったんだ」

勇次「そうだったんだ。（何か俺のときと似てる）」

翔希「どうかした？」

勇次「いや。これからよろしく翔希」

翔希「こっちもよろしく、勇次」

ヴルムこと翔希を仲間にした勇次、これかどんな事が起こるのか、
これからも頼むぞ、仮面ライダーフリード。

つづく

パート13　ヴルムの秘密（後書き）

次回の内容は未定です。

パート１４　第二幹部現る！

土曜日、勇次と翔希はバッティングセンターで、誰が５回一番得点を多く取れるか勝負していた。

勇次の得点は８０点、翔希の得点は５０点で、翔希が５回目を迎えている

翔希「こい！」

翔希はバットを構えると、ボールが８ｃｍの速さで放たれ、翔希がそれを打つと、３０点の的に当たって、引き分けとなった。

翔希「あ～引き分けか」

勇次「そう言わないでよ、お互い頑張ったんだからさ」

翔希「そうだね」

勇次はスピリッツが悩んでる様子を見かける。

スピリッツ「ん～」

勇次「どうした？」

そこに勇次が口を挟む。

スピリッツ「実はこの前のカード獣のことについて・・・。」

翔希「ジークアポロ・ドラゴンのカード獣？」

スピリッツ「そのカード獣から感じた感覚、今までの感覚と激しいものだったんだ」

勇次「激しいって、上級カード獣とは違うカード獣ってこと？」

スピリッツ「おまけに翔希の必殺技を受けても重傷しか負っていないなら、幹部カード獣に違いないよ」

翔希「幹部カード獣って？」

スピリッツ「カードラーが作り出すカード獣さ。カードラーは子供として扱って、能力は魔獣並びで抜群なんだよ」

勇次「あのカード獣のことについて、なんか知ってる？」

スピリッツ「いや、僕もあの幹部カード獣は初めて。でも、幹部カード獣は他にもいるから、今までより強くなる必要があるね。それに考えすぎても仕方ない、今は楽にしよう」

翔希「そうだね、勇次、次は何処行こうか」

勇次「そのまえにこの近くのお寺行かない？」

翔希「いいけど？」

2人は後ろにいくつもの墓がある神社に到着し、「神竜飛鳥、此処に眠る」と書かれた墓石の前にいた。

勇次はポケットに隠していた、野菜ジュースの缶二つを墓石に置いた。

翔希「ねえ勇次、そういえば飛鳥さんって誰だったっけ？」

勇次「俺達が5歳の頃だから、翔希は覚えてないか」

神竜飛鳥は、とても弟思いで、勇次以上の働き者でありがり勉で、勇次の１０歳年上の兄。

しかし、中学を卒業した後の春休み、交通事故に巻きこめれ、この世を去った人物である。

勇次「兄貴、天国でよくやってるかな？」

翔希「心配しないでよ勇次、飛鳥兄ちゃんはおじいさんとおばあさんと良くやってると思うよ」

勇次「そうだといいけど」

その時、スピリッツはある気配を感じた。

スピリッツ「カード獣が近づいてくる！とても強い！」

すると空から稲妻が放たれ、その中から白い体、黄色の複眼、鋼の翼をつけたストライクカードが現れた。

勇次「カード獣！」

ストライク「ん？カード獣の事を知ってるという事は、もしかして仮面ライダーかい？」

翔希「喋った？お前は誰だ？」

ストライク「僕かい？僕はアポロカードの双子の兄弟、ストライクカード」

翔希「アポロカードの兄弟？ということは・・・」

ストライク「そう、僕はカードラーによって作られた、幹部カード獣の一人。」

勇次「やっぱり！・・・うわっ！」

ストライクカードは金縛りで、勇次の動きを止める。

ストライク「僕が用があるのは君じゃない」

ストライクカードは翔希を指差す。

ストライク「そこの金髪君に用があるんだ」

翔希「僕？」

ストライク「僕と君、どっちが強いか勝負だ。さあ、早く」

翔希はそう言われると、バトルライバーを取り出す。

勇次「翔希、お前だけで大丈夫？」

翔希「分かんないけど、やってみるよ」

翔希はメテオヴルムのカードを差し込み、ライバーを付けた。

翔希「変身！」

翔希はヴルムに変身した。

ヴルム「僕の名は、仮面ライダーヴルム！」

ストライク「君が、アポロが言っていた、仮面ライダーヴルムだったのか」

ストライクカードは翼を広げ、翼から炎を吐く。

ストライク「じゃあお先に！」

ストライクカードは背中の翼を広げてから火を吹き、右に向きを変えて飛行した。

ヴルム「あっ！まて！」

ヴルムも翼を広げ、ストライクカードの後を追う。

つづく

パート１４　第二幹部現る！（後書き）

沢山のコメント、お待ちしてます。

パート15　空中激突（前書き）

遅れてすみません！それではどうぞ

パート15　空中激突

札幌上空

ヴルム「まてー！」

ヴルムは最初に飛び出した、邪魔な物を避けながらも、ストライクカードに追いついた。

ストライク「やっと追いついてきたか」

ヴルム「空じゃスターランサーを落としちゃう、だったら！」

はヴルム尻尾の先にドリルがついている、赤のスピリットカードを差し込んだ。

「ウェポンライド・アンキラードドリル！」

ヴルムの右腕が腕が光り、赤の棘がついたドリルを装着した。

次は、赤と黒と白の襟巻きをつけたトカゲのスピリットカードを差

し込んだ。

「ウェポンライド・エリマキシールド！」

ヴルムの左腕が光りだし、赤と黒と白の円型の盾が装着された。

パート１５　空中激突

ヴルムは右腕のドリルを回転させると、ドリルに赤いエネルギーが溜まる。

ヴルム「食らえ！」

メテオはドリルを突きつけると、竜巻のように光線が回転して放たれる。

ストライク「甘いよ」

ストライクはそれを受けたが、まったく効果が無い。

ヴルム「聞いて無い？」

ストライク「さて、僕の実力を見せてやるか」

ストライクは何かの黄色い笛を取り出し、それを一回吹くと、時空の穴が開いて、そこから赤い鳥形ロボットフェニックカードが召喚された。

ヴルム「フェニック・キャノンのカード獣？」

ストライク「見せてあげるよ、ブレイヴアップ！」

ストライクがそれを叫ぶと、フェニックカードが三つの大砲をつけたビーム砲に変形し、何とストライクの背中と合体した。

ヴルム「え！？」

それを見たヴルムは驚愕する。

ストライク「これで避けられても攻撃できる、いくぞ！」

ストライクは一旦上昇し、ヴルムの後ろに回る。

ヴルム「後ろに！？」

ストライク「喰らえ！」

ストライクは三つのビーム砲の先端を重ね、そのまま青い光線を発射した。

ヴルム「まずい・・・うわ！」

ヴルムヴルムは光線を上昇して避けようとしたが、光線は上昇したに後についていき、そのまま命中した。

ヴルム「どうなってるんだ？」

ストライク「フェニックカードと合体している間は、一度狙いを定まれると避けられなくなるんだよ」

ヴルム「避けられないなら・・・」

メテオは黒いマントのような翼を持ち、鎌を持った死神が描かれたカードを差し込んだ。

「アーマーブレイヴ・デスマント&ヘイズサイズ！」

ヴルムの背中に黒いマントの形をした翼が装着され、さらに黄色い刃を持つ鎌、ヘイズサイズが手に握られた。

ストライク「ほう、攻撃を跳ね返すのか、でもいつまで耐えられるかな？」

ストライクは口から稲妻と背中の三つのビーム砲から光線を放ち、ヴルムはヘイズサイズで跳ね返し続けるが、疲労し始める。

「ヴルムはあ・・・はあ・・・駄目だ、跳ね返しても切りない」

ストライク「隙あり！」

ストライクは疲労した隙に、ビーム砲の先端を重ねてそのまま光線を発射した。

ヴルム「まず・・・「ヴルム！」ん？」

すると何処からか声が響き、ヴルムの目の前に二つのジェットエンジンを装着し、右腕に金と銀の大型剣を握った白いフリードが現れ、光線を大型剣で斬り落とした。

フリード「大丈夫？」

メテオ「助かったよ。フリードそのブレイブフォームは？」

フリード「ああ、これ？」

ヴルムがストライクを追って、数分後に遡る。

フリード「まっててよ、俺も・・・「まって！」なに？」

メテオの後を追おうとするフリードを、スピリッツが目の前でとめる。

スピリッツ「ストライクの速さを調べたら、フリード以上で追いつけないから、これ」

スピリッツは金と銀の戦闘機が描かれたブレイブカードをフリードに渡す。

フリード「ポーラキャリバー？使ってみるか」

「アーマーブレイブ・ポーラブースター！キャリバーカリバー！」

ブレイブカードを発動させると、背中に二つのジェットエンジンが装着され、右腕に金と銀の大型剣キャリバーカリバーを右手に握る。

フリード「早い相手には、ポーラキャリバーを使えってことか」

そして現在

フリード「というわけ」

ヴルム「なるほど。でも今は」

ストライク「二対一か、（こっちは連続で打ちすぎて疲労している）今日のところは勝負は預けるが、次にあったら倒してもらうよ」

そういったストライクは姿が透明になり始め、姿を消す。

フリード「逃げられたか」

ヴルム「ヴルムカード、厄介な事になったね」

フリード「こっちも倒されないように、頑張らないと」

その後、2人は築かれない場所に着地し、変身を解いた。

翔希「これから何する？」

勇次「バトスピセンターいこう、欲しいカードもあるし」

つづく

仮面ライダーヴルム紹介

千悟　翔希

勇次同様、札幌男子専門学校に通う9歳の小学三年生
金髪と緑の目をした、千悟電気の坊ちゃんで勇次の幼馴染の親友。
実家か電気屋で、いつも両親の手伝いをしている力持ち。
日光を浴びると落ち着く事が出来る。
好物は丼もの。
好きな教科は図工と体育。

仮面ライダーヴルム

メテオヴルムがモチーフ。フリードと同じに翼を持ち、橙色の身体をし、緑の複眼で、頭の左右に先端を向けた角がある。
空を飛ぶ速さは、流星的速度まで上がることが出来る。
橙色のバトルライバーで千悟　翔希が変身する。

スタージャベリン

ヴルムの槍方専用武器。左右に二つの刃がある。二つに分離して二

刀流になる事も可能。

バトルライバー（Ｖｅｒヴルム）

色が橙色で、形と機能はフリードのものと全く同じ。

パート16　装着、ダブルブレイブ

水曜日、４時間目に国語の漢字試験が行われ、問題は全部で２０問あり、勇次は後五問のところまで来ていた。

勇次「（ええと、合わせるって漢字は、こうで、こう）」

勇次は「合」の文字を書き、その後に、「岩」、「黄」、「皿」、「草」の文字を書いて、問題が全て埋まった。

勇次「（はあ、終わった～。）」

ピーンポーンパーンポーン

４時間目終了のチャイムが鳴る。

教師「はーい、皆さんテストを集めてください」

教師の指示通り、生徒達は教師の机の前に上に重ねて、置いていく。

教師「テストはあさっての二時間目に返します。忘れないでください」

生徒達「はーい！」

パート１６　装着、ダブルブレイブ！

授業が終わって昼休みになり、勇次と翔希とスピリッツは学校の最上階で、前回のヴルムについて話していた。

勇次「ストライクカード、厄介な奴があらわれたな～」

翔希「もっと強くならなきゃいけないよ」

勇次「何か無いかな？例えばブレイヴ二つと合体するとか」

翔希「それは無理だよ、サジット・アポロドラゴンの姿にならないと、ブレイヴは１つしか合体できないから」

勇次「だよな。スピリッツ、何か手とかある？」

スピリッツ「勇次の言ったとおり、二つまでブレイブフォームを装着できるけど」

翔希「ホント！？」

スピリッツ「でも、二つ使うとその力が二倍になるから、それになれるように、身体を鍛えないといけなくなるよ」

翔希「鍛えるね～・・・」

勇次「体育の時間で、鍛える？」

翔希「次の時間は体育だから、その時間使おう」

勇次「そうしよう。それに、早く五時間目が始まるから、体育館にいこう」

翔希「そうしよう」

勇次と翔希は最上階を後にして、体育館に向かった。ちなみに、時間までにギリギリ間に合っていました（笑）。

月面

アポロは六つのブレイブアーマーの内二つを装着して、相性があう

かを周りの岩の攻撃しながら確かめていた。

背中に黄金の翼を背負い、両腕に緑の大型の双剣を握ったベオ・コーンアポロカードになっている。

アポロ「これはうまくいくか試してやる」

アポロは目の前に振ってくる巨大隕石に狙いを定め、そのまま飛び立って隕石に近づき、激突しようとした瞬間に上昇して回避し、隕石の後ろに回る。

アポロ「でいりゃ！」

アポロは双剣で隕石を切り裂くと、隕石は粉々に砕かれた。

アポロ「光速で後ろに回り、そのまま切り裂く、いい組み合わせだ」

アポロは背中の黄金の翼を切り離し、通常の翼に戻り、双剣を手から離す。

アポロ「今の俺に実力を見せてやる。待ってろよ、ライダーども！」

アポロはそのまま地球に向かって飛び立った。

ネクサス空間

この空間には、最上階に赤い太陽石が置かれている神殿がある。フリード達は二つのブレイブフォームになる練習のために、ここを訪れていた。

スピリッツ「先ずはどれとどれで行くんだい？」

フリード「じゃあ先ずはカクレインとペリュートンでいくよ」

フリードは角が弓に様なものになっている鳥が描かれたブレイヴカードと緑色の羽が刃になっている翼を持っている鳥が描かれたブレイヴカードをライバー指し込んだ。

「アーマーブレイブ・レインウウイング！リュートアーチュリー！」

するとフリードの背中に刃が付いた翼が装着され、さらに右腕に黄色い弓を握った。

フリード「何かできるんだろ？」

フリードは白のマジックカードを3枚差し込んだ。

「アタックマジック・ホーリーエリクサー！」

すると目の前に3つの宝石が出現し、それを蹴リ撃って飛び立ち、内二つを背中の翼で切り落とし、弓に光の矢が現れ、それを放つと、残り1つを砕いた。

ヴルム「斬って打つね。じゃあこっちは」

ヴルムは赤と白のブレイブカードをライバーに差し込んだ。

「アーマーブレイブ・レイパック！アーケランス&ブースター！」

ヴルムの背中に金のブースター白いエイの鰭の形をし、大砲が取り付いているバックパックを装着した。を装着し、両腕に双槍を握った。

ヴルム「僕もいってみるか！」

背中とバックパックとブースターが火を噴き、そのまま真っすぐ飛び立った。

ヴルム「お、これはジェット機の2倍はある。これなら・・・」

ゴン！！

ヴルムは二つのゼットパックを二つ付けたために、そのまま止まらなくなって、神殿に激突した。

ヴルム「イタッ！」

そのまま落下し、地面にぶつかる。

フリード「大丈夫、ヴルム？」

それを聞いたメテオは立ち上がる。

ヴルム「平気さ平気、この組み合わせはやめよ」

ヴルムは二つのカードをライバーから取り出し、それと同時に、二つのブレイブフォームが姿を消した。

続く

パート16　装着、ダブルブレイブ（後書き）

期末テストがあるため、一週間休みます。

パート17　ダブルブレイブ対決

二つのブレイブフォームを装着し、相性が合うかを確かめていた。
フリードとヴルムは太陽石の神殿というネクサス空間で、二つのブレイブフォーム

フリード「じゃあ、次は」

「アーマーブレイブ・ポーラブースター＆キャリバーカリーバー！
サンダーカノン！」

フリードが二枚のブレイヴカードを差し込み、背中にポーラブースターと翼に装甲を装着し、右手にサンダーカノンと左手にキャリバーカリバーを握る。

その時、ある光が2人を包み、気が付いたら、現実世界に戻っているどころか、変身が解除されていた。

翔希「どうなんてんの？」

そこへ、スピリッツが話しかける。

スピリッツ「ごめんね。言い忘れてたけど、ネクサス空間にいて、３０分経つと、強制的に現実世界にも度されて、変身していると解けちゃうんだ」

勇次「だからさっきの光が・・・」

するとスピリッツが、カード獣の反応を感じた。

スピリッツ「カード獣反応だ！しかも強い！」

パート１７　ダブルブレイブ対決

勇次「ヴルムかアポロ、どっちなんだろう？」

翔希「とりあえず行ってみよう」

勇次と翔希はバトルライバーを取り出し、Ｘレアカードを差し込んで、腰に装着する。

勇次＆翔希「変身！」

「カメンチェンジ・フリード！（ヴルム！）」

勇次はフリードに、翔希はヴルムに変身して、翼を広げて、カード獣がいる場所に向かった。

札幌ドーム

此処はプロ野球などの、様々大会で使われている施設。南の入り口
にフリードとヴルムが降り立つ。

ヴルム「スピリッツ、此処で間違いない？」

スピリッツ「此処からカード獣の反応を感じるのは間違いないよ」

フリード「どこにいるだろ・・・あっ！」

ヴルム「どうしたの？」

フリード「あそこ」

フリードが指差した場所は、オープンアリーナ。そこにアポロカー
ドが立っていた。

ヴルム「あれはアポロ！」

フリード「行こう！」

２人はアポロがいるオープンアリーナに向かい、到着すると、アポロは２人がいたことに気づいて、振り向いた。

アポロ「きたな、フリードにヴルム」

フリード「今度は何を企んでんだ、アポロ！？」

アポロ「何も企んじゃいない、お前らに挑戦しに着ただけさ」

ヴルム「挑戦？」

アポロ「今の俺に実力を見せてやる！」

フリード「いいけどその前に」

「ネクサスオープン・ツキテラスヒョウケツコ！」

フリードがネクサスカードをライバーに差し込んで、発動されると、2人と一体はネクサス空間に転送された。

ネクサス空間

この空間は、陸全てが氷で、夜空の銀の月に照らされ、近くには湖がある。

そこにフリードたちが現れた。

アポロ「ほう、夜空の下で勝負か、まあ悪くないか。今の実力を見せてやる！」

アポロはストライクが持っている、同じ笛を取り出し、それを先ず

一回吹くと、右に背中にキャノン砲をつけた赤い竜、ガンナーカードが召還された。

アポロ「さらに、ブレイブアップ！」

するとガンナーカードがキャノン砲に変身し、アポロは背中の翼を閉じて消し、キャノン方と合体し、ガンナーアポロカードになった。

アポロ「さらに」

アポロは二回笛を吹くと、黒い翼竜、バーンカードが召還された。

アポロ「ブレイブアップ！」

するとバーンカードは翼を閉じ、剣と盾に分離し、アポロカードはその二つを握り、ガンナーバーンアポロカードとなった。

それを見た2人は驚愕する。

ヴルム「二つも合体した！？」

アポロ「お前らを倒すために、苦労して編み出したんだ。此処でお前らを始末してやる！」

フリード「だったらこっちも！」

フリードとヴルムは夫々二枚のブレイヴカードを取り出して、差し込んだ。

「「アーマーブレイブ」」

「ポーラブスターアンドキャチバーカリバー！リュートアーチェリー！」

「スピニードウイング！レイパック！」

フリードは背中にポーラブスターを装着し、左手にリュートアーチェリー、右手にキャリバーカリバーを握った。

ヴルムは背中にスピニードウイングとレイパックを装着し、黒混ざった色になった。

アポロ「お前らもダブルブレイブをするのか、これでも喰らえ！」

アポロは上半身を前へ倒し、二つのキャノン砲から光線を放った。

ヴルム「危ない！」

２人は上空へ光線を避けた。

ヴルム「おりゃあああ！」

ヴルムはスピニードウイングについている二つの槍で、斬りつけようと急降下し、ＧＢアポロはそれを剣と盾で受け止め、押し合う。

ヴルム「フリード！」

アポロ「何？」

アポロは押しながら後ろを向くと、そこにはリュートアーチェリー

を構えたフリードがいた。フリードは光の矢を放つ。

アポロ「馬鹿め」

アポロは大砲を後ろに倒し、光線を放つと、光の矢と激突して消滅した。

フリード「縦にも傾けられる！？」

フリードが驚愕している間、ＧＢアポロはヴルムを押し返した。

ヴルム「うわぁ！」

アポロ「その通り！」

アポロは後ろへ振り向き、フリードに突進する。フリードはリュートアーチェリーの光の矢を連射するが、突進するアポロにはまったく効果が無かった。アポロはそのまま剣を振り上げ、フリードはリュートアーチェリーを後ろへ投げ、竜手でキャリバーカリバーを握り、それで受け止めた。

アポロ「甘いな」

アポロは背中の大砲をフリードに向け、そのまま光線を放った。

フリード「うわぁあ！」

フリードメテオのいるところまで、吹き飛ばされる。

ヴルム「大丈夫！？フリード？」

フリードはゆっくり立ち上がる。

フリード「平気さ。ヴルム同時攻撃でいこう」

ヴルム「うん」

フリードはライドジャリバーを右足に取り付け、ヴルムはスターランサーを握り、ライバーの中心のボタンを押し、必殺技を発動する。

「「ファイナルアタック」」

「スピリットファイナルキック！」

「メテオシューティング！」

フリードはスピリットファイナルキック、ヴルムはメテオシューティングを発動させ、アポロに向かって急降下した。

アポロ「そうはさせるかよ！」

アポロはフリード達が必殺技を発動させる間に、大砲に力を溜めてフルパワーで光線を発射しようとした瞬間、フリードとヴルムの必殺技がアポロに直撃し、それと同時に、フルパワーで光線が2人を直撃し、相打ちになった。

フリード&メテオ「うわーー！！」

アポロ「ぬあーー！！」

お互い少し大きい傷を被っているため、ふらふらしながら立ち上がった。

アポロ「相打ちか、・・・だが今度あったら・・・死んでもらうか

らな」

アポロは空間の歪を作り、ネクサス空間を抜け出した。

スピリッツ「2人とも、その傷じゃあすぐ倒れるから、僕が送っていくよ」

スピリッツはフリード達の真上に飛ぶと、2人に赤い光を包んで、ネクサス空間を後にした。

つづく

仮面ライダーライジング紹介（前書き）

本編の途中ですが、新ライダーを紹介します。

仮面ライダーライジング紹介

仮面ライダーライジング

ライジング・アポロドラゴンがモチーフ。
背中に鋼の金の翼をつけている。
赤い体に青白い複眼をし、額にエメラルド色の宝石を着けている。
炎やマグマなど、暑い場所にいても体温は上がらず、やけどを負わない。

炎豪　太陽

仮面ライダーライジングの変身前。
札幌男子専門学校に転校してきた転校生。
紫の髪、赤い目をしている。
父親が超能力者のため、少しだけ超能力が使える。
得意な教科は国語と図工と体育。
好物は魚もの。
ライジングに変身すると人格が変わる。

バトルライバー・バージョンライジング

ライジングに変身するための道具。
色は紅色以外、使い方と形はフリード達と全く同じ。

サンスピア

赤の大型槍型のライジング専用武器。
握りもつと、上の先端から炎が出て、刃を形作る。
炎か日光かマグマに当てつけると、炎の刃が大きくなる。

フレイムサンダーボール

ライジングの必殺技。
両腕の手の平に炎と稲妻が混ざった光弾を作り、それを重ね合わせて巨大化させ、敵に投げつける。
重ねた光弾を地面に叩き込むと、光の壁になる。

仮面ライダーライジング紹介（後書き）

次回、ついに登場です。

パート18　太陽光臨（前書き）

遅れてすみません！期末テストがあったので、書く時間がありませんでした！それではどうぞ、新ライダー登場です。

パート18　太陽光臨

神竜家

勇次「いててててて！」

飛鳥「あ、動かないで！」

信二「一体何があったんだ？」

勇次と翔希はアポロとの戦いの後、傷を追いながらも家に到着し、勇次は手当てを受けている。

勿論、翔希も実家で手当てを受けていた。

勇次「翔希と走りで競争しててて、夢中になってたら、木に7回もぶつかったんだ」

飛鳥「そうだったの。今日は無理しないで部屋で休んでなさい」

勇次「うん、分かったよ」

勇次は飛鳥に支えもらいながら、階段に登って自室に向かった。

茶の間に残った信二は考え込む。

信二（勇次から仮面ライダーの波動が、早く俺の事実を伝えないと）

パート１８　太陽光臨

三日後、勇次と翔希の怪我が治り、いつものように学校に登校した。

勇次「おはよう皆」

男子生徒１「おはよう」

男子生徒２「大丈夫？怪我したって聞いたけど」

翔希「有難う。この通りピンピンしてるし、ちゃんと動けるさ」

生徒達に心配された翔希は生徒達に礼をした。

勇次は時計を見ると、７時５９分になっていた。

勇次「早く座ろう」

勇次と翔希は自分の席に座ると、担任教師が入ってきた。

生徒1「きりっつ！」

生徒全員「おはようございます！」

教師「おはよう。突然ですが、今日は天候船を紹介します。入って」

教師がそれを言うと、ドアが開き、そこから紫の髪と赤い目をした勇次と翔希の同い年の少年が入ってきた。

？？？「炎豪太陽です。よろしく☆」

教師「炎豪君は神竜君の後ろの席が空いているので、そこに座って」

太陽「はい」

太陽は自分の席に向かい、勇次と翔希と横合わせになったとたん。

勇次&翔希（！？）

2人は何かを感じた。それと同時に太陽は席に座る。

太陽「神竜勇次君、千悟翔希君、宜しく」

その後、勇次と翔希は小声で話す。

勇次「何で俺と翔希の名前を知ってるんだろ？」

翔希「さあ？」

数分後、昼休みになり、勇次と翔希は太陽も誘って、サッカーで遊んでいた。

勇次「おっと！それ！あ・・・。」

勇次は蹴りでボールを翔希に渡そうとしたが、間違えて太陽の方にけってしまった。

生徒２「危ない！」

生徒煮の声を聞いても、太陽は避けなかったが、目を紫に光らせる

と、何とボールは太陽の当たる寸前で止まり、そのまま着地した。
それを見た勇次達は驚く。

翔希「今の、超能力？」

勇次「俺に聞いても分かんないって！」

２人が相談している間に、昼休み終わりのチャイムが鳴る。

ピーンポーンパーポーン

太陽「あ、鳴ったから戻ろう」

勇次＆翔希「お先にどうぞ・・・。」

太陽「？まいいや」

太陽はサッカーボールを持って先に学校に戻り、二人はその後に続いた。

月中心

その部屋には紫のエネルギー生命体、カードラーがいた。ストライクカードがその部屋に入った。

ストライク「お呼びでしょうか？父上」

カードラー「ストライク、呼んだのは、仮面ライダーどもに対抗して、お前達の三男を作った、それを紹介するために呼び出したんだ」

ストライク「三男？それは誰です」

カードラー「近くにいる。お出で」

するとカードラーの前に氷の竜巻が現れ、それを何かが振り払われると、そこには金の胴体、白の頭と腕と足とマント、額に朱色の宝石を付け、赤い目をした機械カード獣、イグドラシル・カードがいた。

イグドラシル「始めまして兄上、俺はイグドラシル・カード。以後お見知りおきを」

カードラー「ストライク、お前はこのイグドラシルに全ての知識と技術を見につけさせ、フリード達に対抗できるカード獣に育ていきなさい」

ストライク「了解しました」

ストライクはイグドラシルを連れて、カードラーの部屋を後にした。

月面

ストライクはイグドラシルにカード獣を作り出す、手本を教えていた。

ストライク「イグドラシル、良く見ておきなよ」

ストライクは右手に紫のエネルギーの光弾を作り、それを地球へ光線として放った。。

イグドラシル「兄上、あれの光線はなんだったんだ？」

ストライク「あれかい？あれはコア光線、カード獣を作り出すための心臓さ」

地球

勇次と翔希と太陽の3人は、いつも通る道を話し合いながら下校していた。

勇次「あのさ太陽、さっき太陽の前でサッカーボールが止まったんだけど、あれ太陽がやった？」

翔希「そうそう、僕も気になってたよ」

太陽「それは言えないよ」

翔希「どうして？」

太陽「話さなきゃいけないことになったら話すよ」

突然空からコア光線が放たれ、勇次達が通り過ぎた、工場の鋼鉄に直撃し、青の鋼鉄の身体と黄色く光る目をしたロックカードが誕生した。

勇次「カード獣！」

太陽「カード獣？」

翔希「太陽、君は逃げてて！」

太陽「2人は？」

勇次「後で追うから、早く！」

太陽「う、うん」

太陽は言われたとおり先に逃げたと思わせて、ビルの隙間に隠れこんだ。

太陽（あれがカード獣、そろそろこれの出番かな）

太陽の右腕には、オレンジ色のバトルライバーが握られていた。

それを開き、ライジングアポロドラゴンのカードを差し込み、腰に巻いた。

太陽「変身！」

「カメンチェンジ・ライジング！」

太陽がバトルライバーの中心のボタンを押すと、炎が身体を被い、

赤い体、金の翼、額にエメラルド色の宝石、青い複眼をした姿になった。

???「仮面ライダーライジング、参上！」

太陽は、仮面ライダーライジングに変身した。

続く

パート19　ライジングの実力

太陽がライジングに変身している頃、２体のロックカードがゆるい動きで勇次と翔希に近づいていた。

翔希「勇次、変身だ」

勇次と翔希がバトルライバーを取り出して変身しようとしたとたん、スピリッツがバトルライバーに手を置いて変身をとめた。

勇次「スピリッツ？」

スピリッツ「２人とも、今はまだアポロの戦いでの傷がまだ治っていないんだ。変身を解くとしばらくは動けなくなるんだ」

勇次「でも変身しないと・・・」

スピリッツは何かを羽を真っすぐ立てると、何かを感じた。

翔希「スピリッツ？」

スピリッツ「何か来る！」

勇次「何かって？」

スピリッツ「後ろ見て！」

勇次＆翔希「ん？・・・！？」

２人は後ろ向くと、ライジングが飛んで近づいている事に気が付いた。ライジングは、２体のロックカードの前に着地すると翼を閉じた。

勇次「仮面ライダー！？」

翔希「誰？」

パート１９　ライジングの実力

ライジングは後ろを向いて、二人に口を開いた。

ライジング「君達、俺と同じ仮面ライダーかい？」

勇次「どうしてその事を？」

ライジング「俺はどんな波動というものを感じる事が出来るんだ、君達からライダーの波動を感じたから分かったんだ」

翔希「同じライダーなら一・・・「いや君達は下がってて」どうして？」

ライジング「君達、少し身体がボロボロだっただろ、無理したらまた悪くなるから、俺に任せて」

勇次「ライジングの言う通りにしよう」

翔希「そうだね」

勇次と翔希はゴレムカード2体をライジングに任せ、ビルの隙間に隠れた。

ライジング「さあて、思いっきり上げていきますか！」

ライジングは額の宝石を光らせると、赤い槍型武器サンランサーを右手で握り、握ったとたん強力な重力で両腕で握った。

ライジング「おっも・・・でもやるしかないか、とりゃ！」

ライジングは翼を広げ、二体のロックカードの前に着地するといきなりサンランサーで切り裂いた。

ライジング「どうだ！」

しかし、二体のロックカードはまったく無傷で、二体は右の拳でライジングを吹き飛ばした。

ライジング「うわあああ！？おっと！」

ライジングは吹き飛ばされたが、何とか着地する。

ライジング「岩だけあって凄い馬鹿力、こっちも固い奴で行くか」

ライジングは白い竜のロボットが描かれたXレアカードを取り出し、

ライバーに差し込んだ。

「フォームチェンジ・ルナテック！」

ライジングは白の身体、紫の額、黄の複眼の姿、ルナテックフォームに変身した。

ライジングはさらに、白いエイが描かれたブレイブカードを差し込んだ。

「アーマーブレイブ・レイパック！」

ライジングは背中にレイパックを装着した。ロックカード二体は複眼から青い光線を発射するが、全く効いていなかった。

ライジング「俺は炎は効かないの、次はこっちから！」

レイパックから炎を点火させると飛翔し、大砲から青い光線をロッ

クカード二体に放ち、ロックカード達はその衝撃で後退する。

ライジング「まだくるかなぁ？」

後退して体形を崩したロックカード達は体形を戻し、拳で地面を叩き、衝撃波を放った。

ライジングはサンランサーで衝撃波を打ち返し、ロックカード達に直撃する。

ライジング「そう簡単に流行られないさ、ん？」

ロックカード達の様子を見ると、体が青く染まり、両腕の拳が太い針の先になり、ロックカスタムカードに進化した。

ライジング「え！？変わった！」

ロックカスタム達は両腕を上に捧げると、拳を分離させ、空に放った。

ライジング「どこに打ってるんだか、反撃し・・・ん？」

ライジングは空を見ると、ロックカスタム達が放った拳が急降下していき、ライジングはそれを避ける。

ライジング「そうゆうことだったのか、でも・・・」

ライジングは黄色のマジックカードを取り出し、ライバーに差し込んだ。

「アタックマジック・ヘビーゲート！」

すると、地面から桃色の煙が噴出され、それを浴びたロックカスタム達は身体がうまく動かせなくなった。

ライジング「お遊びはおしまい！止めと行きますか！」

ライジングはライバーの中心のボタンを押すと、必殺技を発動させる。

「ファイナルアタック・フレイムサンダーボール！」

ライジングは両法の手の平を広げると、稲妻と炎が混ざった光弾を作り出した。

ライジング「フレイムサンダーボール！」

ライジングは二つの光弾を重ね合わせると、巨大な光弾を津きり出すと、二回３６０℃回転してそのまま投げつけた。

ドーーーン！

それを直撃したロックカスタム達は、稲妻と炎に包まれ粉々になるように爆発した。

膝を突いたライジングを見た翔希と勇次は彼に近づいた。

勇次「大丈夫？」

ライジング「平気さ」

ライジングはライバーを取り外して太陽の姿に戻った。それを見た勇次達は驚愕する。

翔希「太陽！？」

太陽「見ての通り、僕が仮面ライダーライジングさ」

勇次「ライジングの時は俺って言ってたけど」

太陽「僕はライジングになると、性格が変わっちゃうんだ」

勇次は翔希の耳に口を近づけると、小声で喋った。

勇次「キャラが変わるライダーなんて珍しくない？」

翔希「確かに・・・（小声）」

話を見ていた太陽は口を挟んだ。

太陽「どうしたの？」

勇次「いや、なんでもない。それに俺達からライダーの波動を感じる事が出来るって言ってたけど」

翔希「そうそう、僕も気になるよ」

太陽「いいけど、驚かない？」

勇次「え？」

勇次達はその言葉の意味が分からなかった。

太陽「実は僕、半分超能力者なんだ」

続く

パート19　ライジングの実力（後書き）

次回、太陽の秘密が明らかに！

パート２０　太陽の秘密と新幹部

太陽「実は僕、半分超能力者なんだ」

勇次「そうだんだ」

翔希「なるほどねぇ」

勇次＆翔希「・・・え、えええええええええええ！？本当！？」

太陽「本当だよ」

パート２０　太陽の秘密と新幹部

月面

アポロとストライクはライジングが現れた事をカードラーに伝えるため、月の中心に向かった。

カードラー「どうした？ストライク、アポロ？」

アポロ「父上、大変な事になりました」

カードラー「大変な事？」

ストライク「3人目の仮面ライダーが現れたのです！」

カードラー「何だと！？奴の名前は？」

アポロ「イグドラシルの情報によると、ライジングと名乗っていたそうです」

ストライク「さらに、ロックカード達の光線をまったく効果がないと言っておりました」

カードラー「3人目のライダーか・・・。ストライク、イグドラシルの方は？」

ストライク「はい、一休みもせず一週間修行に励んでおり、能力は以前と上昇しております」

カードラー「では、イグドラシルに出陣報告を」

地球

あれから一週間、勇次達3人はクリスマスが近いため、太陽の実家、炎豪家でクリスマスツリーの飾り付けを手伝っていた。

翔希「勇次、赤い玉の入った箱持ってきて」

勇次「ＯＫ。」

勇次は後ろにある赤い玉が入った箱をツリーの前に置くと、色の付いた玉を一個ずつ飾り付けていった。

勇次「そういえば太陽は半分超能力者だって言ってたけど、理由言ってくれない？」

太陽「いいよ。僕のお父さんは、日本語がとても得意なアメリカ人で、しかも・・・超能力者なんだ」

翔希「マジ！？」

太陽「うん。それに僕が使える超能力は波動を感じる事だけだけどね」

勇次「サイコキネシスは使えないんだ」

太陽「そうゆうこと。さあ、早く飾り付けを終わらせよう」

数時間後、ツリーの飾り付けを終え、洋菓子を食べながら休憩していた。

勇次「（モグモグ）ケーキ食べるの誕生日以来だな」

太陽「そうかい。アムッ・・・（モグモグ・・・何か嫌な予感がする）」

するとスピリッツが太陽の予感に答えるかのように、カード獣が出

現した事を報せた。

スピリッツ「カード獣反応だ！しかも強い！」

翔希「何だって！？」

勇次「2人とも！」

翔希&太陽「うん」

3人は太陽の実家から外へ出て、ライバーの中心のボタンを押すと、姿を消した。

テレビ塔広場

そこに光が現れると、勇次達3人が現れ、ライダーの姿に変身していた。

フリード「一体何処にいるんだろ？」

ライジング「透明になっているかもしれないから、探してみよう」

フリード達は仮面の中で両目を閉じた。フリードのようなライダーは目を瞑り、心を落ち着かせる事で、見えない、もしくは隠れている相手を何処にいるか見破る事が出来る、超能力が発揮される。

ヴルムはマントで包まれている何かを発見した。

ヴルム「いた！」

フリード&ライジング「え！？」

？？？「気づかれたか」

？？？は透明のマントを後ろに掃い、マントは白の色が付いて、イグドラシル・カードが現れた。

ライジング「誰だ！？」

？？？「俺はイグドラシル・カード、父上であるカードラーによって作られた、カード獣だ」

ヴルム「カードラーって・・・もしかして！？」

イグドラシル「そう、俺はストライク・カードとアポロ・カードの弟であり、第三の幹部カード獣だ」

フリード「やっぱり」

イグドラシル「さあ、あんたらがどれだけの実力か見せてもらおうと言いたいけど、その前に此処では狭い、広い場所に移動してくれ」

ヴルム「え？・・・はいはい、分かりましたよ」

ヴルムは、鏡で出来ている道が描かれた白のネクサスカードを取り出すと、それをライバーに差し込んだ。

「ネクサスオープン・カガミノカイロウ！」

すると、四人は光に包まれ、ネクサス空間に転送された。

ネクサス空間

この空間では、鏡で作られた道があり、それが宇宙に届くまで続いていた。

そこに光が現ると、フリード達が現れた。

イグドラシル「鏡の世界か、まさに氷に覆われていて美しい場所だと言いたいが、どれだけの実力か、見せてもらおうじゃないか！」

続く

パート２０　太陽の秘密と新幹部（後書き）

次回、フリードが最強変身！

仮面ライダーフリード・フリーデン紹介（前書き）

次回登場のフリード最強形態を紹介します。

仮面ライダーフリード・フリーデン紹介

仮面ライダーフリード・フリーデン

フリードの最強形態で、ジークフリーデンがモチーフ。

胸に銀の装甲、青い部分が金に染まり、複眼は黄色、赤い部分がメタリックの赤になっており、両腕が鋼のものになっている。

身体が頑丈な厚い鋼鉄になっているため、太陽の温度でも溶けず、格闘技や破壊力が高い攻撃でも砕けず、ビクともしない。

咆哮を上げると、最大１００体まで分身できる。

ジークマグナム

フリーデン専用の大型銃型武器。

三つの大砲がつけられていて、右腕に取り付けて使用する。

ダイヤルが付いていて、１２０℃回転させると弾丸、２４０℃回転させると光線剣、３６０℃回転させると光線が出てくる。

必殺技はダイヤル設定によって異かなっている。

パート21　聖皇光臨、フリード・フリーデン

フリード「さあ、かかってこい！」

イグドラシル「ふん」

イグドラシルは肩を開くと、そこからミサイルを3発発射した。

ヴルム「危ない！」

ヴルムの指示で、3人は翼を広げ、散らばって上空へ上昇し、また合流した。

フリード「ロボットだからミサイルを持っていても面白くないか」

ライジング「確かに」

イグドラシル「話をしてる場合かい？」

イグドラシルは金の大型剣を持ち、勢いをつけてジャンプすると、フリードに向けて斬り付け、フリードはライドジャリバーで受け止めた。

イグドラシル「隙あり！」

イグドラシルは両肩からライジングとヴルムにミサイルを発射すると、２人はミサイルを回避しようとしたが、タイミング遅いため直撃してしまい、動き一つもしなくなった。

パート２１　光臨、フリード・フリーデン

フリード「2人に何したんだ？」

イグドラシル「俺の目的はもともとフリードさ、ヴルムとライジングは君を倒した後、しばらく時間を止めてもらったのさ」

フリード「なんだって！？」

イグドラシル「お喋りはそこまで、戦いに集中しよう」

イグドラシルは剣に力を入れて、リードを押していき、フリードは受け止めきれず落下したが、何とか着地に成功した。

フリード（イグドラシルは装甲を持っているけど、赤と白しかない、此処は違う色で）

「ウェポンライド・レシアディフェンス！」

フリードはバグ・レシアのカードをライバーに差し込むと、右腕に赤い花形の盾が召還される。

フリード「さらに」

「アーマーブレイブ・ポーラブースター！キャリバーカリバー！」

さらにポーラキャリバーのカードを差し込むと、背中にポーラブースターを装備し、右腕にキャリバーカリバーを握った。

フリードはイグドラシルにレシアディフェンスを構える。

フリード「喰らえ！」

フリードはレシアディフェンスの中心から緑の光線を放つ、イグドラシルは交わそうとせずに立ち止まったまま光線を直撃した。

フリード「倒した？」

その時、煙から大型剣がフリードに向かって投げつけられ、キャリバーカリバーで跳ね返そうとしたが、反作用が強いため後退した。

フリード「うっ！何だあの固い剣は？」

すると無傷のイグドラシルは右腕で煙を掃い、磁石のように剣を引き寄せてそれを握る。

フリード「やっぱりそう簡単にはいかないか、でも次は！」

フリードは翼を広げてポーラブースターの炎を噴射すると、上空へ上昇していき、キャリバーカリバーを構えて急降下して斬りつける。

イグドラシル「そうはさせない！」

イグドラシルは剣でキャリバーカリバーを受け止め、お互い押していく。

イグドラシル（今だ！）

フリード「うわあああああ！」

イグドラシルは両肩からミサイルを連続発射し、フリードを吹き飛ばした。

フリードは立ち上がろうとしたが、急降下の着地の時に足を痛めていたため、うまく立ち上がらなかった。

それを心の中で悔やむ。

フリード（新しい幹部相手にここまで痛めつけられて、おまけにあいつに反撃１つも出来ないなんて、何が仮面ライダーだよ！）

その時カードブッカーが光だし、フリードは何かと取り出すとオーディーンのカードは光っており、それに引き寄せられたのかライバーからジークフリードのカードが飛び出しオーディーンに近づくと、二枚は融合してジークフリードに銀の装甲と三つの大砲を腕につけた姿が描かれたカードに変わった。

フリード「ジークフリーデン？光ってたのは・・・使ってみよ」

フリードは痛みに耐えながら立ち上がり、イグドラシルは近く寸前まで近づいていた。

イグドラシル「やっと立ち上がったか・・・ん？」

フリード「見せてやるよ、新しい姿を」

フリードはジークフリーデンのカードをライバーに差し込み、その瞬間白銀に変化し、ライバーのボタンを押した。

「ファイナルチェンジ・フリード・フリーデン！」

すると背後から時空の穴が現れ、そこから三つの装甲が飛び出し、1つはフリードの胸と合体して装甲となり、残り二つは両腕と合体して三つの大砲がついたキャノン砲になり、複眼が黄色に変化し、青のラインが金に染まり、手の平が鋼のものなった。

イグドラシル「何！？何なんだフリード！その姿は？」

フリード「違う今の姿は、仮面ライダーフリード・フリーデン！」

つづく

パート２１　聖皇光臨、フリード・フリーデン（後書き）

ご感想をお待ちしております。

パート２２　対決と父の真実（前書き）

今年最後のお話になります。

パート２２　対決と父の真実

イグドラシル「フリード・フリーデンだと？まあいい、姿が変わっただけで何が出来るんだ？」

フリードＦ「言っとくけど甘く見ないでよ。さあて、腕に付いてるのをを使ってみよう」

フリードＦは両腕についている二つのジークマグナムの右腕側のダイヤルを見つけ、それを１２０℃回転させた。

パート２２　対決と父の真実

イグドラシルに狙いを定め手引き金を引くと、光弾が連射され、イグドラシルは剣を回転させて斬りをとした。

フリードＦ「今のは光弾？破られちゃったけど、次は」

フリードＦはまたダイヤルを一旦元に戻し、２４０℃回転させると、大砲から剣の形をして固まった、光線が出現した。

フリードＦ「件にもなるんだ・・・うわっ！」

光線剣が出現したため、重量がより重くなってしまい、その重さに耐えられず地面をつぶして手が落ちてしまった。

フリードＦ「これ出すと重っ・・・でも、やっちゃお」

フリードＦはジークマグナムを左腕で支えて、翼を広げてそのままイグドラシルに突撃した。

イグドラシル「馬鹿め」

イグドラシルは肩から火炎放射を放つ、だがフリードFの装甲は溶けず、熱く感じていなかった。

イグドラシル「何！？炎が効かないだと？」

フリードFの身体は岩と鋼鉄を合成させたような細胞になっているため、炎武器は通じないのだ。

フリードF「ふん！」

フリードFはジークマグナムを振り下ろして、イグドラシルを斬りつけた。

イグドラシル「うわぁ！」

イグドラシルは半分の傷を被って１０歩後退し、負けられるかと大型剣を二本取り出して二刀流となった。

フリードF「もう一本あったのか」

イグドラシルは地面をけり上昇すると、そのまま降下してフリードFを斬りつけ、フリードFは光線剣で受け止めたる。

しかし、それが彼の狙いだった。

イグドラシル「隙やり！」

イグドラシルはこのままの距離でミサイルを発射し、フリードＦは後退した。

フリードＦ「うわ！よくもやったな・・・ん？」

フリードＦはよくもやったなと言おうとした途端、脳の中から何かが映った。

フリードＦ「いきますか。うおおおおおおおおおお！！」

イグドラシル「ついに頂点に・・・！？」

イグドラシルがフリードＦの様子を見て驚愕した。

フリードＦが咆哮を上げた時、２０体に分身したからだ。

フリードはフリードＦの姿になって咆哮を上げると、最大１００体まで分身できる。

それを行った自分自身も少し驚愕した。

フリードＦ「あらら本当に分身しちゃった、でもお返しの時間」

２０体のフリードＦは翼を広げてイグドラシルに向かって飛行し、円の隊形になるようにイグドラシルを囲んで着地した。

フリードF達はまたダイヤルを元に戻すと、今度は３６０℃回転させると、大砲からエネルギーが溜まり、ジークマグナムをイグドラシルに向ける。

イグドラシル「ま、まさか・・・！？」

フリードF「ストームファイヤーストライク！」

フリードF達は一斉に引き金を引くと、炎の光線が竜巻のように放たれてイグドラシルに直撃し、爆発を起こした。

傷を被っていてものの、イグドラシルはゆっくり立ち上がった。

イグドラシル「これ以上は無理か、覚えてろよ」

イグドラシルは身体を透明にして姿を消した。

フリードF「じゃあ、ライダーウィン！」

フリードFはそういって決め台詞を語った。

スピリッツ「何だいそれは？」

フリードF「まぁ、決め台詞は大事かと思ってね、それに早く」

フリードFはフリードの姿に戻り、ヴルムとライジングに駆けられた時止まりののろいを解いて、ネクサス空間を後にした。

神竜家

勇次「ただいまー」

勇次は実家に戻ると手荒いうがいを済ませ、茶の間に入った。

勇次「おとさんただいま」

信二「お帰り、勇次ちょっとこっちにきなさい」

勇次「何？」

勇次は何かとソファーソファーに座っている信二の前に座った。

信二「勇次、話さなきゃいけないことがあるんだ」

勇次「話さなきゃいけないこと？」

信二「今まで隠してたけど、実は・・・」

勇次「・・・・・・・・」

信二「おとさんは、人間じゃないんだ」

勇次「え？」

突然人間じゃない事を勇次に話した信二、果たして彼は何者なのか、そしてその意味は・・・。

つづく

パート22　対決と父の真実（後書き）

いかがでしたか？いよいよ明日で最後ですね、それでは皆さん、良いお年を

パート23　明かされた秘密

信二「おとさんは・・・人間じゃないんだ」

勇次「え？どういうこと？」

勇次は信二が言った言葉の意味が分からなかった。

信二「勇次には今まで隠してたけど、全て話すよ」

勇次「おとさん、人間じゃないてどうゆうこと？教えてくれよ」

信二「分かった。俺は此処とは違う世界、異次元、簡単に言えばパ

ラレルワールドから来た宇宙人なんだ。それに、お前が仮面ライダーフリードだって事は知ってる」

勇次「！？」

その言葉に勇次は驚愕する。

勇次「でも、どうして俺がフリードって事を？」

信二「分かった、長くなるけどいい？」

勇次は良いよと機微を下に振った。

パート２３　明かされた秘密

信二「１つの宇宙と１つの星には、数多くの異世界が存在するんだ。おとさんは此処とは別の星、スピリットコズミックからやってきたんだ。」

スピリットコズミック

その星は豊かな自然が恵み、科学技術が発展して、決して争いはしない住民ばかりが平和に住み着いている星。

そこの住民は身を隠し守るために、身体を幽霊のようにすり抜け透明の物に変えることが出来、様々な超能力が使える。

信二「俺の本当の名前はバースト、信二という名前は地球での仮の名前なんだよ」

勇次「でも、何の関係が？」

信二「あれは、１２年前の話」

話は１２年前に遡る

信二「俺はスピリッツ人の中で最も能力に優れてて、その力を使って邪魔なものを運んだり、危険なものを中に詰める箱を作ったり、悪人を捕まえては人々から感謝されていたんだ。ある深海探検の途中、怪我をしたスピリッツを発見したんだ」

勇次「スピリッツを知ってるの？」

信二「うん。おとさんはその後スピリッツを連れて帰って、手当てをして、身体が良くなるまで一緒に暮らしたんだ・・・それからある日、行方不明になっていたバトルライバーの１つが月に、もう二つは地球にあったニュースがあってね、俺はそれを全て回収するためにウォーデンになって月に向かったんだ」

勇次「ウォーデンって？」

信二「仮面ライダーのことだよ」

勇次「え！？もしかして・・・」

信二「そう、バトルライバーを持ってるし、スピリットコズミックにも仮面ライダーがいたんだ。おとさんのバトルライバーは偶然見

つけたもので、それを使って怪人達を退治してきたんだ。話は戻すけど、どうしても恩返しがしたいスピリッツと一緒に月に向かって、１つを手に入れて地球へ向かおうとしたけど、突然時空の穴が現れて吸い込まれそうになったんだ」

勇次「ライバーは？」

信二「後一歩で吸い込まれそうになった時に、残り二つを頼むってスピリッツに言って渡し、その後吸い込まれてしまって。気が付いたら病院のベッドに寝て、そこでおかさんに始めて会ったんだ。」

１年後。

信二は１０階建ての病院の五階の沢山の建物が見える景色のベットで寝ていた。そこへ飛鳥がさらに乗せたりんごとみかんを持ってくる。

飛鳥「じゃあ、りんごとみかんここにおいて置くわね」

信二「ああ、有難う」

飛鳥「それと、花の水替えに行くわ」

現代。

信二「あかさんは良く仕事を終えた後、俺のところに来てお見舞いしてくれたよ」

勇次「ふーん。それから？」

信二「1ヶ月経っておとさんは退院することになって、一年後には動物保護員になって仕事について、おかさんと結婚する事になったんだ。それから一年後・・・」

神竜家（過去）

飛鳥「あなた、子供が出来たわ」

信二「え？本当かい？」

再び現代。

信二「名前は生まれる前に決めようとしたんだけど、あれは2人とも苦労したな」

勇次「俺の名前をどうしてそれにしたんだい？」

信二「子供が生まれたら、正義感をこれからも強く持ち続けて欲しいから、男の子だったら勇次、女の子だったら恵に決めてたんだ。そして生まれる日がやってきて・・・」

9年前病院、治療室扉前

信二は一人座席に座って、子供の出産を待っていた。そして・・・。

「おぎゃあ！！おぎゃあ！！おぎゃあ！！おぎゃあ！！おぎゃあ！！おぎゃあ！！」

信二「はっ！生まれた！」

すると治療室の扉が開き、そこから一人の女性看護士が姿を現した。

看護士「おめでとうございます。元気で障害無しの男の子でございます」

信二「あの、妻は？」

看護士「ご安心を、一命を問いとめました」

信二「そうですか（よかった、死ななくて）」

現在。

信二「そしてお前が生まれて、「勇次」という名前にして、平和な暮らしが始まったんだ。まさかお前と翔希君と太陽君がバトルライバーを手にして、仮面ライダーになったのは正直驚いたよ」

勇次「あとさん、おとさんのバトルライバーは？」

信二「あるけど、まだ時空の穴を越えたときの傷がまだ治っていないんだ。治ったら変身して協力するよ」

勇次「たすかるな～。あ、それに？」

信二「何？」

勇次「変な事聞くけど、おかさんは音さんが宇宙人だって子と知ってる？」

信二「勿論おかさんも知ってる。勇次、バトルライバーが治ったらすぐ駆けつけるから、それまで皆と頑張ってくれ」

勇次「うん、約束する」

つづく

パート２３　明かされた秘密（後書き）

次回、思わぬゲスト！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9960u/

仮面ライダーフリード

2012年1月6日21時50分発行